天地の境界

sAi

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
天地の境界

【Ｎコード】
Ｎ６８８６Ｕ

【作者名】
ｓＡｉ

【あらすじ】
平和な国　ヴェルドニア皇国。
ある日、防衛の要である水晶が壊れた。
皇国の「正式な傭兵」ラングルドと宮廷魔導士のクラウドはそれの原因究明と修復の為に旅に出る。
皇国の平和の陰に隠された秘密とは一体何か。悠久の時を超え、明らかになる事実。
ラングルドとクラウドの運命は・・・？？

※【6】あたりから若干の残酷描写あります。ＢＬは「あるの？」って程度です。

【1】（前書き）

初めて小説という物を書きます。
読みにくいかも知れませんがお付き合い頂ければ幸いです。

また、何分にも未熟なゆえ、ご指導、ご鞭撻の程
宜しくお願いいたします

【1】

『いつからここにいたんだろう・・・・』

真っ暗な闇の中、水よりも少しぬるっとした様な液体に浸かりながら、少年はふと思う。
ふわりと肢体を投げ出す。気持ちがいい。

誰もいない。
光さえ届かない。天も地も解らない。

そんな世界。

『もうすこし・・・もうすこしだけ・・・ねむろう・・・・』

そういって、胎児の様に丸くなった。

＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋

パチパチと、何かが爆ぜる音が聞こえる。
そして、その時になって、自分が寝ていた事に気づいた。

目の前のたき火に目をやると、だいぶ火の勢いが小さくなっていた。

「寝てたのか・・・・」

返事が来ないのを承知の上で、一人つぶやく。
周りを見渡す。

森の木々は涼やかな葉擦れの音を奏で、時々、小鳥のさえずりが聞こえる。
空には夜と朝が共存しはじめていた。

夜明けだ。

彼は脇に置いていた革袋から水入れを取り出すと、一口飲んだ。
おもむろに立ち上がり、軽く伸びをする。
まるで猫の様なしなやかな筋肉は、その動作だけで本来の能力を取り戻す。
無駄無く鍛え上げられている証。
彼が傭兵である証。

脇に抱えていた剣を腰に穿いて革袋を持つ。

まだ呼吸をする様に光る火を残す焚き火に目をやり
足で砂をかけて消す。

「・・・後少しか。」

そういって男は紅い髪を揺らして街道に出る方向へ歩き始めた。

＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋

ここはルルドの街。
ロンディアス大陸、ヴェルドニア皇国の南の玄関港。

「こらぁぁぁぁ！！！！！ベリケーーー！！！！！」
「やだよーー！！っだ！　先生だってマホウ使ってるじゃないかー

！！　僕だってできるもんー！！」

町中に響き渡り、静寂をぶち破る。
中央の広場に面した数件の民家。その何れかの家からのようだ。

バン！！！！

一番端っこにある家のドアが勢いよく開き、１０歳くらいの男の子が飛び出す。
ソレに続いて。

「まちなさぁぁーーーい！！」
『先生』が子供を追いかける。
しかし、相手は子供。体力無限大。どうみても持久戦になりそうな雰囲気だ。

３，４週、中央広場の噴水の周りを回った後、ベリケは路地に曲がる。
・・・が。何かにぶつかったかの様によろめいてその場に尻持ちをついた。

「ベリケ！！大丈夫ですか？！」
『先生』が駆け寄るとベリケは「いたたた・・・」といいながら『先生』をみてバツが悪そうに笑う。

路地から男が姿を現す。
「・・・・・・よぉ、クラウド＝フォン＝デュアリス。」
「？！」
名を呼ばれるまで気づかなかったらしい『先生』ークラウドーが、がばっと仰ぎ見る。

紅い髪。使い込まれた皮の上着。腰に剣を携えた男。

「ラ・・・・・ラング！！！　ラングルド＝ディア＝スフィア！！！」

男ーラングルドーの顔を見るとクラウドの顔がパッと明るくなった。

「先生？、この人誰？」

ベリケがクラウドを見上げる。

「私の古い友ですよ。こう見えても彼はこの国のー」「クラウド。」

言いかけた所でラングルドに遮られる。都合の悪い内容らしい。

「あぁ、つい・・・すみません・・・。ここで話すのもなんですから、ウチへ行きましょうか？」

ベリケに立つ様に促しながら「すぐそこですし。」とラングルドへ提案する。

「助かる。丁度、喉が渇いて来た所だったんだ。」

背中の革袋を背負い直してラングルドがはにかむ。

「良かった。」「お客さんだね！先生！」「そうですね」

そういってベリケに微笑み3人はクラウドの家へと入っていった。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

「何年ぶりでしょうかね？」

ラングルドに椅子を勧めてクラウドはいそいそとお茶の用意をする。

ベリケはというと、あれからすぐに友人に誘われ近くの森まで遊びにいった。

あれだけ広場を駆け回ったのに、全然足りないらしい。

「5年・・・くらいじゃねぇか？」
椅子の背もたれに体を預け、お茶を用意するクラウドの背中を眺める。
「随分昔の様な気がしますね。でもご無事にお戻りになって下さって良かった。」
にっこりと笑って振り返る。

「・・・・・・。クラウド。」「はい？」

「相変わらず、男みたいだな・・・・。」
ボソッとつぶやいた瞬間、クラウドの顔が笑顔のまま凍り付く。

「・・・・ラングルド・・・・私は正真正銘の男ですが、何がご不満です・・・？」
「あぁ・・・いや・・・・思わず。」

クラウドの見た目は良い。半端無く。
髪は飴を溶かした様な甘い琥珀色、腰まで届く長さ。色は白く瞳の色は翡翠色。
顔の造りも非の打ち所がない、彼の恋人になりたがる女性は数多だ。
だが皆、口を揃えて言うのは並んで立ちたくないという。
それほどに彼の容貌は際立っている。

線は細いが細すぎる程ではない。背もそれなりにある。
そんな容貌をしているので、道行くおばちゃんに「あらぁ！背が高いのねぇ。男の子みたいねぇ！」
なんて言われてしまう位だ。男なのに。

体を預けた椅子がギィと鳴く。

「・・・・・状況は芳しくないぞ。」
天井のシミを見上げながら、どうでも良い事の様に言い捨てると
「・・・・・そうですか。」と拾う様に答え、彼の前にお茶を差し出す。
「登城しますか？」
「報告に行かんとならんしな。」

差し出された茶をすすり、ひと心地つく。体中に染み渡る。
紅い瞳を閉じる。ひと呼吸置いて、正面からクラウドをひたと見据える。

「明日、城へ向かう。その時はお前も来い。恐らく『そういう勅命』が下る。」

ぐいっと飲み干すと「うまかった。」と礼を言う。

「・・・何となく予想はしてました。・・・・今夜は泊まって頂けますよね？」
そう返しラングルドが頷くのを確認すると部屋を出て行った。

【1】（後書き）

拙い文章にお付き合い下さいまして有り難うございます。

【2】

ヴェルドニア皇国はロンディアス大陸の西方に位置する大陸一の国家である。

北にミリヤ連峰、
東にはエルグトゥス峡谷、
西にバヌア砂漠、
南にはオーウェン海を望む資源豊かな国家である。

更に付け加えるのならば隣国は
北にエンブリオ皇国
東にスーギニア王国
古には領地をめぐり戦いも有ったが、ここ１００年は何れの国も賢君に恵まれており
諍いは殆ど無くなっていた。

ヴェルドニア皇国の歴史はロンディアス大陸では一番古く、古文書を読み解き、ある程度は遡る事はできるが、
古すぎるが故に限界が有り一定の時期から以前の文字は解読されておらず
現時点では学者達の推測であるが故に神話化されている。

統治体制は、原則的には皇帝が国を治めており、皇帝は行政と軍部の最高権力者である。
一見して独裁国家に見えがちでは有るが、
実際は行政と軍部共にお互いを監視する機関を持っており、加えて行政には元老院が設置されているため事実上は分権化されており、
皇帝が独裁者となる事は極めて難しい。

ー皇城、ワイバーン。　執務室。

ヴェルドニア皇国皇帝、サナトリシア＝エイン＝ヴェルドニアは机に山積みになった書類と格闘していた。

コンコンとノックされる。

「・・・・居る。」

返答を待って大きな扉が開く。

大きい割に軋み音がしないのは上質な材料と腕の良い職人が作り上げたという証拠だ。

「皇帝陛下。ご報告致します」

入るなり、腰を落とし、右片膝と左拳を床につき頭を垂れる。

騎士の礼だ。

「申せ。」

「ルルドに配備した部下からです。『紅き陽が白き月を伴って北に沈む』との事です」

「・・・そうか。ようやっとまみえるな・・・。」

そのままでは理解しがたい内容であるが、報告を受けた者はそうは思わないらしい。

机から目を離し、報告を持って来た騎士に目をやる。

「面をあげよ。」
「・・・は。」
「大儀であったな。・・・・ヴァイン。ルルドからの者に十分な休息を。」
傍らで様子を見ていた男にそう告げる。
「既に用意してございます。」
「そうか。有能な宰相で助かるな。」
そういうと部屋の主はニッと笑ってペンを持ち、騎士へ向かって行け行けと振る。
有能な宰相ヴァイネル＝フォン＝グランディスは「光栄に存じます」と目礼した。
騎士が退室するのを見送ってからヴァインは皇帝を見る。
「陛下。」
「なんだ。」
机に視線を戻し黙々と執務をこなす皇帝に苦笑する。
「『白き月』もお呼びになったのですか。」
サインをしようとしていた手が止まる。
一泊置いてフフッと笑い、ペンでクルクルと円を書き出す、かなりの上機嫌だ。
「妾は呼んでおらぬ。おそらくは『紅き陽』の判断だろう。全く察しが良いというか、鼻が利くというか・・・。」
「なぁ、ヴァイン。」

止めた手を再び動かす。
「お前といい、ヤツといい、妾は誠に恵まれた皇帝であるな。」
「勿体ないお言葉。」
そう言ってヴァイネルは頭を垂れる

「うーん。お前はもう少し崩れた方が良いな。」
反論されない様、堅苦しく頭を垂れた宰相に満面の笑みでゴリ押しする。
「努力致します。」
そう言うとヴァイネルは口元に薄く苦笑を浮かべお茶の用意をしに部屋を出た。

夕日が部屋を染めていた。

＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋

ルルドの街。

「クラウド。」
長椅子にごろんと横になってラングルドが話しかける。
「なんです？」
夕食の後片付けをしながらクラウドはラングルドに視線を投げた。
「お前、あの子に術を教えているのか・・・？」
天井で明かりに揺れる陰を見つめながら問う。
日中、クラウドが勉強を教えているという少年。

「ベリケのことですか。あの子には勉強以外は何も教えていませんよ。才能が無い訳では有りませんが、私のソレとは違う性質の子ですから・・・それに教えるつもりも有りませんし。」
「教えろと言ってウルサいですけどねぇ。」
苦笑しながらテーブルを拭き、食後のお茶の準備をする。
だから昼間も魔導書を持ち出していたのを見つけ、追いかけっこになったのである。
物珍しい力、自分に少しでも才能が有るのではないかと考えるのが普通ではないだろうか。
好奇心旺盛な子供であれば尚更の事・・・・・。

「お前と同じ性質のヤツなんか、そうそう生まれるもんじゃねぇよ・・・・。」
クラウドに聞こえない様にボソッとつぶやく。

クラウドは特別な力を持っている。
それは平たく言えば「魔法」「魔術」「魔導」といった類いの力では有るが、
特徴的なのは「聖」と「魔」を併せ持つ力を持っている事だ。
その力の素質を持つ者は、幼い頃から顕現しており、必ずどちらかに偏るのである。
なぜならば「聖」と「魔」はその相反する力の性質が故に一つの器（体）に共存する事は出来ない。
共存の瞬間に互いの性質で相殺され「無能」となりその力は失われるのである。
結果的に「偏った力」か「無能」かのどちらかしかないのである。

しかし、時としてその原理から外れる者が現れる。クラウドはもれなくその例である。

原因はまだ解明されていないが、もはや神の領域に近い。
「今頃は陛下にも連絡が入っているんでしょうねぇ・・・」
苦笑いをしながら煎れたお茶をラングルドに渡す。

「あー・・・・地獄耳だからなぁ・・・・あの女。」
「ラング！陛下に向かってそのような・・・！」
「いーじゃねぇか、ココに居ねーんだし。」
受け取った茶をズズズーッとすする。

「さてと。飯も食った、茶も飲んだ！・・・・・一息ついた事だし。そろそろ真面目に話をしようかね？」
寝そべっていた長椅子から身を起こし、テーブルに両肘をつくとニッと不適に微笑んだ。

【2】（後書き）

サナトリシアの「私」を「妾」に修正しました

【3】（前書き）

【1】【2】に比べると今回はちょっと長いです。
お付き合い頂ければ幸いです。

【3】

テーブル上のキャンドルの炎が揺れる。
それにつられる様にラングルドの紅い瞳が揺らめく。

「フェンネルの水晶が壊れた。」

溜め息まじりに言う。

ヴェルドニアは東西南北の要所に力の強い精霊を配し、皇国防衛の要としている。
北方、ミリヤ連峰の麓にある「アインストの大樹」には風の精霊
東方、エルグトゥス峡谷にある「エンデューラの大岩」には土の精霊
西方、バヌア砂漠のオアシス「リースヴェルの泉」には水の精霊
南方、オーウェン海に浮かぶ大フェンネル島「フェンネルの火山」には火の精霊
それぞれの象徴する色の水晶が媒体となり精霊の力を持って皇国を守っている。

そのうちの一カ所、フェンネルの火山にある水晶が壊れたというのである。

「フェンネルですか・・・ 確かに芳しくはないですね。しかし・・・・また随分と・・・・」

カップをテーブルへと降ろしながらクラウドも溜め息をつく。

「やりづらいな・・・。」

クラウドの言葉の尻を拾う様にラングルドが続け、アテも無く天井を仰ぐ。
フェンネルの火山に配されている火の精霊ファルボックは４体の精霊の中でも特に力が強かった。
故に、媒体である水晶も相当の力を持っていなければならなかったので水晶を見つけるのにも一苦労なのだ。

ラングルドは諸々を思案し深くため息を一つつくと、視線を戻す。

「俺も何が起こったのか全く解らん。」
何か問いたげな顔のクラウドを見て静かに首を横に振る。

「ファルボックが俺の水晶に自己申告して来なければ、何の能力もない俺には知り得なかった事だ。
・・・・というか、お前の方が俺よりも解る事が多いんじゃないのか？」
その特殊な力ゆえに。

「力のバランスが傾いているのは解っていましたが・・・・・」

クラウドは瞑目する。
自身の特異な力は皇国を護る為にあると自負している。
その為にこの身に特異な力が共存しているのだ、自分の存在意義はそれに尽きるのだと。

ここ数日、何となく力のバランスが傾いている様な気がしていた。
しかし、壊れている事までは解らなかった。
ファルボックが確信させない様に頑張っていたという証拠なのだろうが、要所の水晶に何か有れば皇国を揺るがす事態になりかねないというのに・・・・。不覚である。

「ファルボックはお前に心配かけたくなかったみたいだぞ？」
「それは私に報告をしない理由にはなりませんよ．．．。」
呆れてこめかみを押さえうなだれる。
「私に気を使い、皇国を危機にさらすとは．．．．。」
見損なわれているようで情けなくなる。
ラングルドは首から下げていた小さな革袋を取り出した。
少々くたびれたこの袋の中には、皇帝から下賜されている水晶が入っている。
何かあれば精霊がこの水晶を通じてラングルドに話しかけてくる。
その辺の水晶とは比べ物にならない、桁外れな力があると言っていた。
だから「無能」のラングルドでも精霊と会話が出来る。
ーしかしクラウドは水晶が無くても精霊と会話できるのだ。
クラウド自身は物心ついた頃からの至極当然の事だったので、何の驚きや疑問も無く
その事実を受け入れて来たのだが、ラングルドに言わせれば「氷で湯を沸かす力」と訳の分からない例えをする。
火の精霊「ファルボック」は砕けた水晶からラングルドの水晶を通じて報告して来た。
直接会話の出来るクラウドにではなく。ラングルドに。
少し戸惑った様に「なんかよく解んないけど石が壊れちゃった。」と。
「今の所はすぐに危ないという訳では無いと言って来ているから、

お前の力で飛ばなければならない程の緊急性は無いんだが、砕けた事は事実のようだ。
ファルボックといえど体力無限大ではないからな・・・ のんびりもできん。
登城は・・・・ 面倒だが、私情を挟んでる場合じゃない。忙しいだろうから謁見は難しいとしても少なくともヴァインには報告しなくてはならんだろう・・・・。
あと、念のため他も調べる。コレを通じて話せば早いだろうが基本的に精霊からの働きかけが無いと会話できねぇし・・・・ 世間知らずな精霊(アイツら)達の事だ、市井の事情までは興味がないだろうから直接聞いてもアテにならん。
最低でも現在、水晶がどのような環境に有るのか、知る必要が有る。
」

一気に今後の予定をまくしたて、
ひと呼吸置いてから目の前にぶら下げた革袋を懐にしまい、面倒くさそうにため息をつく。

「・・・って、また皇都に留まらない理由を説明しなきゃならんのだろうなぁ・・・・・。・・・・・ 絶対・・・『ついでに』押し付けてくるに違いねぇ・・・」
最近、魔物が出るという噂も聞いている。多分・・・ いや、ほぼ確実に押し付けてくる。

水晶が壊れた以上、再度、水晶を設置し術を施す必要がある。
フェンネルの火山へ行くには海を渡らなければならないのだが、彼の火山島は人が住めるような島ではない上に人々は時折噴火するその島を「神の島」と言って恐れて滅多に近づこうとしない。漁師がまれに漁をする程度だ。
故に、交通手段が限りなく乏しく「泳ぐ」か「小舟を買って漕ぐ」

かのどちらかだ。
上手く行けば漁師が乗せてくれるだろうが、何れにしても自分たちで何とかし無くてはならない事には変わりない。

クラウドの術を使えば楽に空間移動する事も出来るのだが、ラングルドはクラウドに負担をかける事を極端に嫌う。
彼の術は完璧である。それ故にその「楽」をする事に恐怖すら感じるのだ。命を削っているのではないか？と。
だから気力、努力、体力、根性で何とかなるものはクラウドを頼らない。

「でも、5年前から『正式に』傭兵をなさってるんでしょう？」

何かを思い出しクスクスと笑いながらラングルドを見る。
普通に考えれば「正式な傭兵」なんて有り得ない話である。
「主」と「傭兵」との間柄は雇用する側、される側であって、忠誠を尽くす関係ではない。
だから「傭兵」は「主」に対して「正式」等という事はありえない、あるとすればそれはもう生涯の「主」を決めたのと同じ事だからだ。

「事態を予見してたのかどうかは知らねぇが、助けてやったらスゲー事言いやがったからな。」

背もたれに寄りかかり、フンと鼻を鳴らすと不服そうに顔を背け腕を組む。

ラングルドは5年前、たまたまお忍びで城下に遊びに来ていた皇帝陛下を酔っぱらいから助けた。
嘘のような本当の話である。

基本的に傭兵は、謁見はおろか登城すら叶わない身分であるから皇帝の顔は知らない者の方が多い。
特に現皇帝は即位してから１０年が経つが４年前までは、性別すら公表されていなかった。
そういう状態である、ラングルドが助けた少女が「実は皇帝陛下でした」なんて言われたとしても
その場にいた者は誰も気づかなかったし、
第一、皇帝が夜に一人で城を抜け出して酔っぱらいに絡まれてるなんて思いもよらないだろう。
どんなに「お忍び」だとしても普通は供の者をつける。普通は。

ラングルドも例に漏れず、思いもよらなかった類いの人間なので、
助けたと言っても、腰に下がる剣の柄で酔っぱらいの脇腹を小突いた後、
少女の襟首を掴み、酔っぱらいに蹴りを入れてひっぺがすという乱暴な扱いで助けたのであって、
伝説に出てくる「姫を守る、騎士」のような美しいモノではなかった。

「助けて貰っといて、開口一番に『一生涯。傭兵として私に雇われるか、下僕として私に仕えるか、どちらが良いか選べ。』って普通、言わねぇだろ・・・・」
「まぁ・・・普通は・・・。・・・・ですが、陛下ですから・・・・・・。」

「今思えば言い兼ねないって言うのは理解出来るけどよ。それでも、あん時は身分を明かしてないんだぜ？『コイツ、頭おかしい？』って思った俺は間違ってねぇだろ。」
「・・・というか、お前、隣に居ただろう、知ってたのに黙ってやがって・・・。」

テーブルに身を乗り出す。

ラングルドの反応はマトモだろう。
そして、その場に居たクラウド以外の周囲の人間も同じ事を思ったに違いない。
もし、あの時、近衛の将軍が駆けつけなかったら・・・そして、その将軍とラングルドが旧知の仲でなかったら、
ラングルドは迷わず少女(皇帝)を警備兵の屯所まで連れて行き「落とし物を拾いマシタ。」と言って押し付けて来ただろう。

クラウドが臣下の礼を取れば気づくとは思うが、
敢えて知らぬフリをしていたのは皇帝・・・サナトリシアが目配せしていたからである。
ラングルドはともかく、彼女の方は相手が「誰」なのか解っていたのかもしれない。どうも試していた節が有る様な気がするのだ。
これも、「今思えば・・・」であるが。

「陛下はお小さい頃から活発な方でしたからねぇ・・・・」

しみじみと言いながら、やんわりと矛先を外し冷めてしまったお茶を飲み干す。

「いやいや、活発だからって皇帝が夜中にフラフラ出歩いてたらマズイだろうがよ。シオンが来なけりゃ解んなかったぞ。」

シオンとは先に述べた近衛の将軍である。
正しくはシオナード＝レイ＝ハッシュブルといい、その血筋は武術に秀でており何人もの将軍達を輩出して来た由緒ある家柄だ。
近衛将軍に就任以来、常に皇帝の傍らにあり片時も離れる事が無い

男。その男が夜中に城下にいるのはおかしい。
彼の姿を見た途端、ラングルドはこの少女が皇帝である事を悟った。
「ですが、経緯はどうであれ、陛下の人を見る目は間違っていなかった訳です。貴方が隠している『紅の傭兵』の素性をその場で見抜き『正式な傭兵』になるしか無いような選択を投げかけてくるんですから。」

「主は選べなくなるが傭兵の方が、一生下僕よりマシだろうが。俺的にはどっちもヤダっていう選択肢も欲しかった所だが・・・・・」
露骨に嫌そうな顔で、クラウドを見る。
コイツが皇帝の横でニッコニコ笑ってなければ、その場をぶっちぎることも出来たのに・・・・・。
あの場に於いて笑顔で脅迫してくる目の前の男が恨めしく思えて来た。

助けたすぐ後のサナトリシアのあの台詞。
すぐに駆けつけて来た近衛将軍のシオナード。
何かを察したかの様に傍観を決め込むクラウド。

要するに、グルだった訳だ。打ち合わせの様な事こそしていないだろうが、
最終的に考えるとやっぱりそう言う結論しか無い様な気がする。

だめだ、何だか疲れて来た。

「・・・とにかく、今日はもう遅い。明日、ココを発つ。準備しとけよ」
「わかりました。ベリケには暫く留守にする旨を伝えておきます。」

にっこりと笑む。
どことなく嬉しそうなのは気のせいか・・・・？
互いに、「おやすみ」と言葉を交わすと席を立ちそれぞれの寝室へと入っていった。

窓から見える空には白銀の月が輝いていた。

【3】（後書き）

ありがとうございました。
まだまだ続きます。

ご意見やご感想を頂けると嬉しいです。

【4】

寝台に腰をかけ、髪を梳いていると右耳朶に付けていた水晶がチリチリと電流の様なものを発した。

あぁ・・やっと報告する気になったのか。

耳環の水晶はラングルドが皇帝陛下より下賜されたものの様に力を持っている訳ではない。ただの水晶だ。

だが、精霊達はクラウドに話しかける時に「呼び鈴」代わりにこの耳環を使う事が多かった。

直後ー

『クラウ・・・・怒ってる？』

鼻先を熱気が舞い、景色がゆらゆらと揺らめく。

怯えた少年のような声が直接頭に響いてきた。

手を止めて「やはり・・・」と小さく溜息を漏らす。

「・・・・気になるのなら、何故、報告しないのですか・・・。」

『そ・・っ』

「心配をかけたくないというのは理由になりませんよ。精霊の貴方が私の存在意義を知らない訳ありませんよね？」

『っ！！そんな事を言うからだろ！！』

叫び声がした瞬間ー

ゴォ・・・と熱風が渦巻き、熱で空気を歪め赤い髪の青年が現れた。
声から想像されるイメージとは大分違う感じだが、彼の表情からすると恐らく同一人物だろう。
折角、梳っていた髪が乱れた、ただ脱力してこめかみを押さえ項垂れる。

『お前はいつもそうやって自分を大切にしない！
何も出来ずにそれを見ていなきゃならない精霊(俺)たちの気持ちなんか解ってないだろう！』

青年は小刻みに震える手をぎゅっと握り締める。
精霊には実体がない。
だが、実体がないからこそ、流れ込んでくる感情がどのようなモノなのか
呼吸をする様な必然性を持って明確に伝わってくる。

クラウドは・・・・すごく怒ってる。

「・・・・・貴方はこんな所に来ている余裕が有るんですか・・・・
いい加減にしなさい。」

櫛を傍らに置き、その場に立ち上がると冷ややかに青年を一瞥する。
翡翠色の瞳の奥に眠る、凍てついた海の様な冷たい蒼い光。
空気が急速に冷えてゆく・・・・・青年の発する熱など無いかの様に。

『お前がやらなくたって、一言、精霊(俺)たちに命じればいいだけだ！
どんなに危険な事でも喜んでお前の役に立つ。古よりこの国と結ばれたのはそういう契約だ。
精霊(俺)たちは死んだりしない！何を恐れる！！これしきの事、何故「水晶を再構成しろ」と命じない！！！』

歯を食いしばり更に食い下がる。
ダテに精霊をやっている訳ではないし、軟弱な精神の持ち主でもない。
だが、このクラウドの気迫は４大精霊最強を誇るファルボックさえも竦み上がらせるだけの凄みと力を持っているのも事実だ。

「・・・・黙りなさい。理由はどうであれ皇国を危機にさらした事は事実です。さっさと帰って大人しく水晶(助けられる)を作ってもらうのを待っていなさい。」
『っ！！何故解ろうとしないんだ！！』

ギリギリと砕けそうなくらいに奥歯を噛み締める。
何故だ・・！こんなに・・・こんなに想っているのに！
聞き入れてもらえない歯痒さと、何も出来ない事への憤りが行き場を失う。

ファルボックの水晶は他の精霊の物とは違う。
ラングルド辺りは「クラウドがどっかから見つけて来たスゲー水晶」だと思っているかも知れないが、そんなモンではない。そんなモンでファルボックの力を留めておく事は出来ない。
それはクラウドの命の一部を結晶にしているような物だった。
それが砕けた。原因は解らない。でも砕けたのは事実だ。
クラウドの手前、何事も無かったかの様に隠し通せる自信は無かったが、それでもクラウドに負荷がかかるような事態だけは避けたかった。
自分の力を宿らせていた水晶だ、最初から造り出す事はできなくて

も、破片を使って再構成くらいは出来る。・・・・たぶん。
もし仮に出来なかったとしても、平時の役目くらいは平気だ。

だから「自分で何とかしなさい」と命じてほしかった。
クラウドは「水晶(助けられる)を作ってもらうのを待っていなさい。」と言った。
それはすなわち「命の一部を結晶にしているような物」を「最初から造り出す事」。
造り出す所を実際に見た訳ではないからその代償が何なのかは解らない。
だが、とてつもなく負荷がかかりそうな事は容易に想像出来た。

一見女にも見えなくはない外見で侮られる事もしばしば有ったのだが、
今程その外見と気性のギャップを恨めしく思う時は無いだろう。
見た目そのままに大人しく言う事を聞いてくれれば良いのに！とファルボックは苦々しく思う。

「ファルボック・・・・私の役目を邪魔するのは許しません。」
『クラウ・・・っ！！』

今にも噛み付きそうな青年に、容赦ない言葉を叩き付け、熱空間を右手で薙ぎ払う。
これ以上はどのみち並行線である。
ただでさえ水晶が壊れて不安定な状態であるはずなのに、これ以上、ファルボックに無駄な力を使わせるわけにはいかない。
美しく揃えられた指先が空間に切り込むと、不安定にたわみ、青年の姿がユラリと消えた。

「・・・・解っていない訳ではないのですよ・・・・。」

払ってしまった右手を強く握り込む。血の気が引き、蒼白になる拳をただ見つめる。
本当はこんな扱いなどしたくない。優しい気持ちは痛い程解っているつもりだ。
彼らが誰を愛し、何を恐れているのか、この役目に就いてからその事を実感しなかった瞬間は一瞬たりとてなかった。
己が守るべき要所に力を留め、様々な理由をつけながら常に傍らで気遣ってくれていた。
想われていないなどと誰が思おうか。

だから・・・解っているからこそ譲れない物が有る。

「精霊(あなた方)たちが想って下さる様に、私とて精霊(あなた方)たちが愛しく大切なのです。このままでは・・・・・」

あなた方も・・・・一部に・・・・。
うなだれて床に視線を落とす。突き放すしか無いではないか。

「ファルボック・・・私は・・・ライリーン様の・・・・・」

最後まで言わずに言葉を飲み込む。自分にしか解らないことだ。
たとえ精霊であっても「彼女」の想いまでは解らない。

どうしてこの国に精霊が必要なのか。
どうしてこの国が栄えているのか。
その繁栄の裏に何が有るのか。

緩く首を振り胸元をギュと掴むと「そこにあるモノ」が僅かに熱を発したような気がした。

ふぅ・・・と、詰めていた息を漏らし、もそっと寝台へ潜り込むと、早々に意識を手放した。

＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋

広大な庭園に３人は居た。
その庭の造りは一目で尋常ではない権力と財力を持っている事を物語っている。
休憩用に作られたのであろうと思われる四阿(あずまや)でめいめいが長椅子でくつろいでいる。
驚く事にこの３人、容姿、声の質、仕草、何もかもが同じである。
ただ、耳朶に付けた耳環の色が少し違うだけ。

「ねぇ、知ってる？」

金色の耳環の男が寝そべりながら問うと他の二人を見た。
ここ最近で一番のニュースだ。

「ん・・・・？」

その言葉に反応する様に銀色の耳環の男が読んでいた本から目を上げ次の言葉を待った。

「・・・・・・・・何を？」

２拍程空いたにもかかわらず続かない会話に、自分も返事をしなければならないのかと

横になって瞳を閉じていた紅色の耳環の男が僅かに身じろぎして聞き返す。

「サーシャの所にラングがくるみたいだよ？」

金色の石の男は嬉しそうににっこりと微笑んで身を乗り出す。

「それって・・・・」

「・・・・この前の？」

二人は少々驚いた様に目を瞠る。

サーシャとラングの再会は5年前・・・・あの脱走事件以来になる。

あの時は身内の我が侭に正直、彼が気の毒にも思えて何とも言えない心境だった。

普段、彼女はそのような周囲を困らせる様な事や人の気持ちを鑑みない言動をする様な人間ではない。

何が有ったのか解らないが、自分たち3人の兄にすら我侭を言った事のない妹が、

相手の気持ちを考えずに取った行動に、

そして、その相手が「紅の傭兵」であった事に少なからず驚いたのも事実だった。

「そう。フェンネルの件。」

先日、壊れたという水晶の報告は上がって来ている。

何れ妹が何らかの手を打つだろうと思っていたが、こちらの配下の者から報告されたのは少し前だ。

このタイミングで考えるなら勅使が伝える前に動いていたという事になるか。

まぁ、彼らの素質を知る妹なら行動のみの把握で勅使を出していな

い可能性もあるが・・・。
長椅子から降り、四阿の手すりに身を預ける。

「そっか。じゃぁクラウも戻ってくるのかな？」

銀色の耳環の男はごく自然に沸いた疑問を、期待と共につぶやき読んでいた本を閉じると傍らに置いた。
常に一緒に居る訳ではないらしいが、何となくクラウドとラングルドは2人で1セット的なイメージが有るのだ。
ラングルドが皇都にくるという事はクラウドも来そうな気がした。
彼、ークラウドが皇都から離れたのは数年前。それまでは宮廷に居た。
宮廷魔導士最高位の地位にあるからだ。

「わからないよ。クラウは。」

わずかな期待を紅色の耳環の男がけだるそうに肘をつき顎を乗せて即答で否定する。
クラウドは宮仕えが嫌で皇城を出た訳ではないが、ある意味、それに近い物はあるだろう。

何せ、あの容姿だ。
普段は自身の執務室か宰相の部屋に籠りっきりなのだが、たまに書庫へいったり部屋を移動する為に部屋を出る事が有った。
行くすがらに暑苦しい大臣（オッサン）から耳元に何やら囁かれたり、
陛下付きの侍女と勘違いされたり、
年若き騎士に言い寄られていたりという目撃情報も多数耳にする。

自分たちの耳に入るくらいである、その頻度はうんざりする位だろう。そりゃ城に居たくないと思う気持ちも理解出来る。

まぁ、そういう事態を憂慮した上で滅多に人前に出ないようにしていたようだが、
その事を差し引いても自分の存在を周知させていないという点に於いては彼の悪い所なのだろうが・・・。

それに、彼が余り出歩かなかったのは単にそれだけの理由という訳ではない。

「まぁ・・・クラウが帰ってくるとしても・・・セフィルス様とリヴァイシス様に見つからないと良いんだけどねぇ・・・・。」
「う・・うん」
「そ・・そうだね」

何やら3人、気まずそうに視線をかわす。
そう。見つかると大抵大騒ぎになるのだ。だから見つからない様に出歩かないだけなのである。

口を揃えて賛同したものの、どう考えても否定的な結果が待ち受けているであろうと容易に想像がつく。

そして、それによって城内が荒れるという事も。

【4】（後書き）

有り難うございました。
ご感想など頂けると嬉しいです！

【5】

＋＋＋＋＋＋

少し遅い昼食を取ると、サナトリシアは寝椅子に身を預け、少しだけ休息を取るつもりで目を閉じていた。
部屋を吹き抜ける午後の風。
心地よい。

このまま、執務を放り出して兄上達と狩りにでも行こうか・・・・。

そんなことを考えていた時。

「陛下・・・・。」

そう声をかけられ、寝椅子の傍に気配を感じる。
目を開けると、心配そうな、困ったような目でヴァイネルが見つめていた。

「・・・言いたい事は解っておる。そんな目で妾を見るな・・・・。」
「一時的で構いません、クラウが登城するならお二方に見つからぬ様になさいませんと・・・・」

気怠げに頭をもたげ手を差し出す。
彼はその手を取り、サナトリシアが体を起こすのに手を添えた。

「見つからぬ様にと申すが、精霊とご先祖様相手にどうしろと申す

のだ・・・。よもや封印する訳にもゆくまい・・・？」

細い眉根を寄せ、今度はサナトリシアが困惑する。

「いえ、最後の手段はそれしかございません。・・・ えぇ・・・ クラウが久々に参るのです。
むしろそれくらいしないと効かないかもしれません・・・ 特にセフィルス様はクラウに並々ならぬご執着がおありですから。」

そういうと、ヴァイネルは腕を組み、顎に手を添えると何やらぶつぶつとつぶやいた。

「お前というやつは・・・・・ クラウが絡むと極端だな・・・。セフィルス様がクラウに並々ならぬご執着をなさるのは致し方なかろう？」
「解っております。ですが、クラウは『クラウド』であって『ライリーン』様ではないのです。いくら魂の一部を宿しているといえども、あからさまに『そのような目』で見られるのは堪え難き事では有りませんか。」

お前も違う意味で相当なモノだぞと、内心呆れながら寝椅子から立ち上がる。
どれだけ心配性なんだ・・・。

「だからリヴァイシス様がおられるのであろうが。少しは冷静にならぬか。」
「はぁ・・・・。しかし・・・」

「禁忌を犯したとはいえセフィルス様は聖の精霊の名を持つお方だ、いくら何でもクラウを傷つける様な事はなさらぬだろう。

ヴァイン・・・お前が必要以上に気を揉む事はない。」

しかし、相手は精霊だ。しかも最高位の。
隠し切れるモノでもない・・・・・。
変に警戒してクラウドを幽閉などしようモノなら酷く拗ねられて後々面倒である。
むしろこの際だからキッパリとクラウドに言わせた方が良い様な気もして来た。

クラウドが出仕していた頃はまだ良かった。
「明日また来ますから」となだめすかす事も出来たし、執務中にこっそり様子を見に来ていた事もまだ容認出来た。
だが、出仕しなくなってからというもの、年に一度の年始の挨拶の時などはそれはもう大騒ぎで
セフィルスにちょっかいを出されたクラウドがキレて、その度に城のどこかが破壊されたりしていたのだ。

年に一度の対面時でもコレだ。
何年も会えなくなるという状況になったら一体どうなるのかと思うと、かなり憂鬱になる。
城が吹っ飛ぶどころの話では済まないのではないだろうか・・・。

ヴァイネルはフッと気を緩ませた。
これではまるで保護者のようでは無いか。。

そばの椅子にかけてあった上着を手にすると、「少し風が出て参りました」と言いながらサナトリシアの肩へ掛ける。
取り乱した自分に気づき、少々バツが悪い。

「そうですね・・・。お見苦しい所をお見せ致しました。」

「良い。気に致すな。妾とて同じ気持ちだ。」
「後ほど、セフィルス様とリヴァイシス様にお会いしてクラウの件のご報告をして参ります。」
頼む。と返事をしてぐぐっと伸びをする。
何となく、寝そびれてしまった気がするが、ヴァインが気にするので黙っておく。
それでも少しの間、横になったお陰で思考に曇りはなさそうだ。
執務机につこうとヴァイネルの横を過ぎようとした時。
「失礼致します。」
断りと共にサナトリシアの視界が転がる。
一瞬、何が起こったか解らずに居ると、間近でヴァイネルの横顔が見えた。
抱き上げられている。
「・・・・何をしておる。降ろさぬか・・・・・政務が残っておろう。」
「いえ。陛下に戴かなくてはならない決済の分は午前中に終わりました。残りは私が片付けておきますので、陛下はこのままお休み下さい。夕食まで寝台をお出になりませんように。」
そのままサナトリシアには視線を送らず、ゆっくりと扉へ向かって歩みを進める。
「・・・・・お前。午睡を邪魔したと勘違うておるのか？」
何やら少し気まずそうに声をかけるとヴァイネルとカチッと視線が合う。

「私が知らぬとお思いですか？・・・・・ファルボックの件、連日、ろくにお休みにならずお調べでしょう。陛下がお休みになって下さらない、このままでは体調を崩されてしまうと女官長(フェリシア)が泣きながら報告してきましたよ。まったく・・・・泣かせてどうするんですか。」

扉の前で立ち止まると、部屋に控えていた近衛がスッと扉が開ける。皇帝が拉致されそうになっているというのに
この状況下では皆、ヴァイネルの味方らしい。なんと言うか、実に教育の行き届いた近衛達である。
これは降ろしてもらえそうにない。そう察して仕方なく大人しく連行される事にする。

こうなったら隙を見て政務に戻れば良いだけの話。

扉から一歩出た所でふと立ち止まってヴァイネルがこちらを見る。

「あぁ、申し上げておきますが、見張りには私の私兵をつけます。容易には抜け出せませんので余計な事はなさらないのが賢明かと存じます。」

若干、勝ち誇ったかの様に微笑まれ何とも言えない気分になる。
ヴァイネルの私兵・・・近衛と同格、いや、それ以上とも言われる実践実力派の戦闘集団。
抜け出すのも絶望的になった。やはり兄上たちと狩りに行けば良かったかと今更ながらに後悔するが、もう遅い。

執務室とサナトリシアの寝室はさほど離れていない場所に有ったのでモノの数分で到着してしまった。

ヴァイネルが扉の前に立つと、退室時と同じ様に近衛が扉を開ける。
「そこで待て」と目配せして扉が閉まる。
部屋の中には騒がしさを不審に思ったのかフェリシアが待機していた。

ヴァイネルはフェリシアを視界の端にとらえながらも、サナトリシアを抱えたまま躊躇いも無く寝台へ近づく。

「随分と聞き分けが宜しいですね。」
寝台の傍らに立ち、サナトリシアの顔を覗き込みながらニッコリと笑む

「今までの経験上、お前がこういう行動に出る時は抗っても無駄だと解っておる。それにー」

隅の方で不安そうな視線を送るフェリシアに少し微笑むと、視線を戻し真っ直ぐにヴァイネルを見据える。

「・・・・今回は少し位は悪いと思うておる。」
「お解り頂けて良かった。」

そういうとそっと寝台に降ろす。
ふぅ・・・と気を緩めた瞬間。吐息がかかりそうな距離にヴァイネルの顔が迫る。

「これ以上、フェ(我が妻)リシアを泣かせないで下さいね。」

お前のこの行動の方が世間的にはよっぽど妻を泣かせかねない状態だと思うぞ・・・。と、心の底から思っても口にしない。
どうせ無駄だ。この夫婦は世間が何と言おうと、そう言う観点は持

ち合わせていない。
サナトリシアが言うのも何だが、二人とも、サナトリシアを中心に世界が回っているのだ。
そりゃもう、凡人は想像出来ない様な恐ろしい程の価値観で。

現にフェリシアは心配そうにサナトリシアを見つめこそしても、恨めしげな視線は送って来ないのだ。
夫がこんなことしても。

フェリシアが心配しているのは自分がうっかり夫に泣きついてしまったばかりに、自分の大切な姫が夫に怒られてしまうのではないとかという事だけであった。
だから尚更、フェリシアがヴァイネルに泣きついたと聞いて、サナトリシアは本当に心から反省したのだ。
彼女に冷静な判断をさせない程に自分は無理をしている様に見えたのだろうか・・・・・。

・・・しかし・・・顔が近い・・・・
是と答えるまでこのままかと悟り、サナトリシアは小さくため息をつく

「・・・・わかった。フェリシアは泣かさぬ。」
「ありがとうございます。」

ヴァイネルはスッと体を離し、にっこり微笑んで礼を言うと、後はフェリシアに任せ部屋を出る。

控えていた近衛に下がる様に伝えると、近くに居た女官に自分の執務室に待機している兵を呼びにいかせた。
程なくして兵が到着すると人の出入りを禁ずる旨を伝え待機を命じ

た。

サナトリシアに話していた用件を済ませるため、廊下を進んでいく。
広く広大な敷地には所狭しと色とりどりの華が植えられて、見る者の目を楽しませている。
だが、実際にこの花々を見て心を癒される時間がある者はこの城には少ないだろう・・・。
そう思うと、綺麗な華達も少し不憫だなとヴァイネルは思う。

「おや、ヴァイン。・・・・・・・どこに行くの？」

少し行った所で不意に声をかけられた。
金色の耳環を付けた男が、脇の通路の壁に身を預け立っていた。

「・・・・これはクライシス殿下。ご機嫌麗しく・・・」
「ふふ・・・。相変わらずお前はカタイねぇ。」

恭しく頭を下げ正式な礼を取ろうとしたのをクスクスと笑いながら右手を軽く振って止められた。

「今から聖の間と太陽の間へ向かう所です。」
「あぁ・・・クラウの件だね。んー・・そうだなぁ・・・僕も釘を刺しに行っていいかな？」

ニコニコ笑っているが、それだけではない雰囲気に流石のヴァイネルも苦笑する。
質問形なのに否と言わせない。
ヴァイネルは無言で答えて、歩き始めたクライシスの後ろを一歩下がってついてゆく。

暫く歩いてからふと胸の内に湧き出た疑問を切り出してみる。

「・・・・・・なぜ殿下もご一緒に？」

全ての事に於いて、いつもは余り深入りせずに傍観を決め込んでいる三兄弟が何故。
変に遠回しに聞くのも煩わしい気がしたので、直入にきいてみる。
答えてくれる確証はないが。

「うん？・・・・・・そうだねぇ・・・・・面白そうだから？」

なーんてねぇー。と言って振り返りながら笑う。
つくづく掴み所の無い性格である。
なんとなく、その態度に思い当たる節があった。ならば・・・

「仰りたくない訳ですね。では質問を変えます。『何故クライシス殿下がいらしたのですか？』」

その問いかけに張り付いていた笑顔がスッと引っ込む。
海の様に青い瞳の奥が若干の剣呑さを孕んで揺らめく。
それは一瞬の事で、ともすれば見過ごしてしまう様な瞬間であった。

「・・・・・・ヴァイン・・・・・お前は、やっぱり優秀だね。僕は今、サーシャの宰相がお前で良かったと心から思っているよ。うん。」

「・・・・お答え頂けますか？ご返答如何によってはご一緒頂く訳には参りません。」

立ち止まって真剣に問うヴァイネルに、クライシスも同じく歩みを止める。

そして、笑顔を貼付けてゆっくりとヴァイネルに近づく。

「言っただろう？『・・・僕も釘を刺しに行っていいかな？』って。でもまぁ・・・お前がそう言う反応をする所を見ると、お前も同じ様な事をサーシャに聞いたんだろうねぇ。そして、やんわり止められたんだ。・・・・・ちがうかな？」

「・・・・。」

「やっぱりね。お前が聞かない訳が無いと思ったよ。だったら皆が知らない所で『僕が僕の勝手でやる分にはいいのかなぁー？』と思ってさ。あぁ、勿論、この事は僕の独断だからジュノシスやルヴァシスは知らないからね。本当に僕一人の考えだよ。」

無言で話を聞いているヴァイネルに悪びれも無く言う。

三兄弟は皇帝の兄であるが、「皇帝なんて僕達には合わないよねぇー。」と何とも意味の分からない理由で3人で帝位継承権放棄。

さらに「神官の方が楽しそうだよねー。」という謎な理由で放棄と同時に神官の位に就いた。

皇帝の兄が神官になったとはいえ、その為の修行は他の者への待遇と変わらない。

どんな身分の者であったとしても下っ端から経験を積み上げてゆくのがヴェルドニアの神官職だ。

幸いにも（？）3人ともにその資質があったようで、メキメキを腕をあげそれなりの能力を有している。

だから、封印なんて言う物も出来てしまう訳である。

「・・・・・殿下。それを私に喋ってしまえば止められるとはお思いになりませんか？」

ヴァイネルからの問いかけに、クライシスは肩眉を上げる。予想していなかった問いかけだったのだろう。

だがすぐににっこりと笑う。

「うん?・・・あぁ・・・そうだねぇ。・・・でも、お前は止めないよ。解っているだろう?僕達がサーシャの為にしか動かないという事、そしてサーシャの為にならないモノが辿る末路を。あぁ、大丈夫、封印はしないから安心して。他に用事があるんだよ。」

ふふふっと楽しそうに笑むと「おいていっちゃうよ?」と右手をひらひらとさせて歩き出す。

信用していない訳ではないが、一抹の不安を抱えながらヴァイネルは溜め息をついて後に続いた。

【6】（前書き）

若干の残酷描写有り。

【6】

＋＋＋＋＋

ラングルドにとって旅そのものは日常的であったし、
用意するものといっても、いつも持っている革袋に水を若干買い足したのみで、
食料などは常に2日分くらい余分に持ち歩いているので取りあえず今は買い足す必要は無かった。

クラウドの装備が些か気になってはいたのだが、彼もまた年に一度皇都へと赴いていることもあり、
意外と慣れた段取りでテキパキと準備をしていた。
彼の几帳面な性格を考慮したとしても、一般的な家庭には置いていないであろうと思われる携行食や水が
当然の様に用意されていたのは流石に驚いたが。

取りあえず、朝から買い出しに奔走しなくてはならない様な事態にはならずに済んだ訳だ。
そう言う訳で、ラングルドが思っていたよりは多少早めにルルドを出立出来たのである。

ラングルドは隣を歩くクラウドを見ながらふと今朝の光景を思い出す。
朝を迎えると身支度を終わらせたクラウドはベリケの家に行き、暫くは勉強を見てやれない旨を伝えに行った。
ラングルドは椅子に座ってお茶をすすっていた訳だが、暫くすると子供の泣き声がした。
母親の声とクラウドの声が交互に聞こえ、その内に泣き声が止んだ、

それから少ししてクラウドが戻って来たのだ。

しかし、まぁ、なんというか・・・・

彼がこんなにも子供に好かれていようとは思いもよらなかった。

当時、まだ近衛兵だったシオンからクラウドが出仕していた頃の話を何度と無く聞かされていたが、

皇城に居たころの彼は無愛想でどうにも取っ付きにくい感じだったらしい。

城を抜け出したクラウドとシオンの3人で一緒に酒を飲んでいる時は普通なのだが・・・・

まぁ、得体の知れないオッサンとか若造に追っかけ回されていれば必然的にそうなってしまうモノなのかもしれないが・・・・。

とにかくラングルドが知りうる限りでは、クラウドに対して女の様(そのよ)な扱(うな)いをする人間には

その視線で射殺せるんじゃないかと思う程に非常に冷たかった。

本人の認識はというと自身の容姿に関して、「女に見える事もあるらしい」というゆるい自覚は有るらしい。

だが、イマイチ理解しきれていないのだろうと思う。

勿論、男としての魅力が無い訳ではない。

背丈だって決して小さい方ではないし、骨格だって、肉付きだって女性のそれとは違っている。

思慮深く、地位も権力もある、おまけに絶対的な能力も。

故に女性にだってモテる。

後宮に詰める女官達にとって、クラウドに附随する「無愛想」や「冷ややかな視線」などというものは嫌悪感や恐怖感を与えるというよりも、むしろ逆に興味をそそるモノらしく、皇帝の召還に応じて参上した時などは行く先々で感嘆の溜め息でざわめくのだ。

他の男なら後宮の女官達をざわめかせたという事実は喜ぶ事であるのだろうが、容姿に関連した事でクラウドが喜んだ事は一度も無い。むしろ、追っかけてくるのが男と女のどちらであっても煩わしく感じてしまい、
結果、常に容姿が先だってモノ申すような、いわゆる「宮廷社会」では無愛想なのである。
実は人嫌いなのではないかと言う噂が立っているという話も聞いた事が有る程だ。

それが、今の彼はどうだろうか。
一番鶏が鳴くと同時にひっきりなしに子供から老人まで彼の家に訪れるのである。
皇城に居た頃の様な理由で彼を訪れる者は居ない、誰一人としてそのような視線を送る者は居ない。
今朝、採れたての卵だとか、野菜だとか、朝食はどうかとか。挙げ句には一杯どうじゃ？とか、そういう他愛も無い用件だ。
その都度、彼はにこやかに丁寧に礼を言って心遣いを受け取っていた。

何というか、本当に別人のようなのである。

「・・・？なんです？」

思わず笑ってしまったのがバレたのだろう、訝しげな顔でクラウドがこちらを見る。

「いや、お前でも子供に好かれるんだなと思ってな。」

街を出る時のベリケの表情を思い出した。寂しいのを我慢して、笑って手を振っていた男の子。

「どういう意味です・・・。」
「いやいや、お気になさらず。泣く子も黙る最高位の皇国宮廷魔導師サマ。」
「どうしてそういう言い方をするんですか・・・まったく・・・。」
ふふんと鼻で笑って左手をひらひらと振ると、若干むくれた顔で睨まれた。

平原を過ぎ、ちょっとした森にさしかかった頃ーー
「・・・ふん。どうやら好かれているのは子供にだけじゃないようだな。」
ラングルドは低く呟くと腰に穿いていた剣の柄に手をかけ少し腰を落とし、周囲の気配を探る。
クラウドもそれとなくいつでも術を発動出来る様な体勢を取っていた。

「・・・私が行きましょうか？」
「・・・。・・・・・・。・・・・・・問題ない。俺一人で行ける。大人しく見てろ。」

言い切ったと同時に木々の間から3つの陰が飛び出してくる。
取りあえず、魔物ではないらしい。覆面を被った黒尽くめの人間だ。
ラングルドはその内の1人に狙いを絞ると、相手の一閃を屈み込んで難なくかわし、
そのまま体をバネの様に伸ばして懐に飛び込むと、抜き様の剣の柄で鳩尾に一撃食らわし地面に沈む前に後頭部にもう一撃。

崩れ落ちる相手の体と入れ替わる様にもう1人が迫ってくる。
右から迫る次の手を剣で薙ぐ。

かわされて宙を切る。ーーーちぃっ。

舌打ちをして身を翻すと剣を構え自分の背後を狙っていたもう1人と目が合う。
目が合った瞬間に焦ったのであろう。既に繰り出されていた一撃は止まらない、振りかぶった為に胴辺りがガラ空きだ。
迷い無く腹に蹴りをいれ、反対側に吹っ飛ばすと、運良く木の幹に頭を打ち付けて気を失った。

すぐさま残りの1人に視線をやると、獲物を構え俯きがちにジリジリと間合いを計っている。

ラングルドは視界の端にクラウドを確かめると彼は言われた通り、腕を組んで「大人しく見て」いる。・・・・・・今の所は。
ーふん。と鼻を鳴らす。組んで隠した右手の中は微かに紅い光を放っている。
いつでも「行く」つもりなのは変わりないようだ。

横取りはカンベン。

「お前ら弱すぎだ。・・・・というか・・・・・俺、狙われる心当たりが有り過ぎて解んねぇんだけど・・・・・・。」
剣を降ろし、「理由、教えてくれませんかね？」と腰に手を当てて相手を見る。

「・・・・マ・・・・・。・・・・・・・タメ。・・・・・セ・・・・・・・・

・ロセ・・・・・・・・。」

覆面でくぐもって聞こえるが明らかに何か様子がおかしい。剣の切っ先がユラユラとぶれている。
その時、俯いていた眼がラングルドをとらえた。

瞬間、彼はその場から大きく飛び退く。
彼が居た場所は、飛びかかって来た先ほどの男を中心に大きく陥没していた。

「ラング！！」
「あー。大丈夫だって。・・・・クラウド、アレって人間か？！」

後ろから聞こえるクラウドの声に反応しながらも、視線は外さない。
これは・・・・明らかに人外の力だ。

「恐らく何者かに操られているのではないかと思いますが・・・・操り主が解りません。
探ろうと意識を集中しているのですが、黒い靄のようなモノに阻まれて・・・・。」

クラウドの声音に焦りが見え隠れする。妨害は想定外のようだ。
その内に目の前の男の繰り言が明確に聞こえて来た。

「・・・・・・セ。・・・ロセ。・・・コロセ。コロセ。」
「・・・・・・勘弁しろよ・・・・」

こんな状況なのに若干引いてしまう。気持ち悪ぃ・・・と顔が引きつる。
が、この体は良く慣れた物で、キチガイな人間を目の前にしても震

え一つ来ない。筋肉の過度な緊張もない。むしろ絶好調。
まぁ、ほら、・・・・あれだ。正気のキチガイよりは随分とマシだ。
うん。
だが、いくら「マシ」でも「危険」なのは変わりない。やれやれとため息をつく。

「はぁ・・・・・・。・・・・・・・・クラウド！殺しても文句は聞かん！」

そう叫ぶと、彼の返事を聞かずに一足飛びで間合いを詰め、横一閃をかわして下から上へ斬り上げ、すぐに飛び退く。
紅い飛沫が視界を覆い断末魔が木々の間をこだました。

「あーぁ・・・・・。こんなに汚してくれちゃって・・・・・。」

皮の外套にベッタリとついた返り血をみてうなだれる。
飛び退いていなければもっと酷く全身に浴びていたであろう。
どこかで洗い流さないと、こんな格好（ナリ）では皇都の入り口で間違いなく止められる・・・・・。
というか、あの女に何を言われるか解ったもんじゃない。これ以上、小煩い事を言われてたまるか。
剣を一振りしてしたたるモノを振り払う。

「・・・・・ラング。気絶させた者達が消えています。」

クラウドの声に顔を上げると、彼はそこに居るはずの兇手を探していた。
・・・・・隙を見て逃げたのか・・・？・・・・・いや・・・・クラウドがそれを見逃す様な失態をするはずが無い。

「・・・・放っておけ。関わってるヒマは無い。用が有ればまた来るだろう。」

足下の血溜まりを出来るだけ避け、転がった死体の衣服を引き裂いて自分の剣についた血を拭いながら返す。
また来られるのも面倒ですけどねぇ・・・と呟く声が聞こえる。

とりあえず、聞かなかった事にして近くに有るはずの湖へと寄り道する事にした。

【6】（後書き）

進んでいっている様な、進んでいってない様な・・・・（汗

作者も何だかじれったくなってきました（汗

ご感想など戴けると嬉しいです。

【7】（前書き）

会話よりも説明文が・・・・長い（汗

【7】

その湖は街道から少し入った所に有った。
少しといっても地図上の話で、実際に歩くには可成りの時間を要した。

「お、見えたぞ。やっぱり俺の勘は正しかったな。」

目の前の木々の合間から見える湖面のきらめきを目にすると、ラングルドはクラウドを振り返りニッと笑って、歩みを早めた。

・・・・・ 勘で歩いていた割りには随分と自信ありげな足取りだった様に思うが・・・。きっと彼は堂々と迷子になるタイプでしょうねぇ。
クラウドはそんなことを考えながら一人笑う

「そんなに急がなくとも湖は逃げませんよ・・・」

クラウドが声をかけるが聞いていないようだ。
ラングルドは畔にたどり着くなり衣服を脱ぎ始めた。
剣がついている帯剣用の革帯を外し、
皮の小手とバングルを外し、
上着を留めている革帯を外し、
本来の目的の主役のはずの上着と
ついでにその下の着込(きごみ)みを景気よく脱ぎ捨て、
皮長靴を脱ぎ・・・・
・・・・ とにかくいっぱい外して・・・ 半裸で湖へ飛び込んだ。
大概の物が丈夫ななめし革で出来ているのでコレだけの装備が付いていればさぞかし重いだろうと思うのだが、彼にとってはいつもの

装備なので何とも思わないらしい。
その内にクラウドも畔に辿り着く。
性分がそうさせるのか、やれやれと呟きながら彼の衣服を拾い上げ軽く叩く。
ラングルドは腰まで浸かりながらワシャワシャと頭を洗っていたが、クラウドが上着を拾っている姿を見ると「悪いな。」と声をかけた。
が、次の瞬間に眉間にしわを寄せ、ザブザブと水から上がってきた。
一体どうしたのだろうかとクラウドが首を傾げる。
「お前、俺の上着抱えただろ。お前までベッタリじゃないか・・・・。」
クラウドの腕を掴み、その手から自分の上着を取り上げる。
あ。と小さく驚く。なるほど、白い上着に・・・・汚れが。
「あぁ・・・仕方有りませんね。私もここで洗っていく事に致します。」
注意力散漫ですねと自嘲する。
手際よく上着の留め具を外して脱ぐと簡単に畳んで脇に抱え、ラングルドに「洗いますから」と上着を渡す様に促す。
「・・・・・・・なぁ、クラウド。」
何だか少し楽しそうな顔を見て、ラングルドは自分の上着を彼に渡しながら口を開く。
ずっと気になっていた。

「なんです？」

上着を受け取ると今度は汚れない様にと汚れた面を内側にして畳み直す。。

「・・・・・それは・・・まだお前を縛り付けるのか・・・？」

彼の視線はクラウドの胸元に有った。

薄い衣服のその下。

「・・・・コレですか。『幸いにも』私の命が有る限りはココに在り続けます。」

そう言って片腕に上着をまとめて持つと襟元を寛がせ、胸元を広げてみせる。

そこにあるモノを見て、ラングルドが一瞬目を眇める。

白い肌にくっきりと浮かび上がる、子供の拳程の大きさの赤い文様。

細く細やかで華の様な紋様の中に古代文字の様な物も刻まれている。

「そんな顔をしないで下さい。生来の物ですから痛くはないのですよ。」

ラングルドの表情を読み取ってかクラウドが困った様にいう。

「・・・痛くないと言っても・・・お前・・・・・それの所為で・・・。」

随分と辛い目に遭っているじゃないか。

クラウドはデュアリス公爵家の長男として生まれた。
だが首も据わらぬうちに両親から引き離され、皇城へ連れて来られたのだ。
古くから伝わる伝説に出てくる紋様を胸に刻んで生まれたからだ。
ヴェルドニア皇国　有史を語る際に必ず名前が出てくる人物、「始まりの姫、ライリーン」を表す紋様。

ライリーンの華紋様・・・この紋様を持つ者にはライリーンの魂が宿り、必ず異能が開花し、その異能を以て人々に平和と豊穣をもたらし安寧へと導く。
伝説の中でそう語られる紋様。

そう、「平和と豊穣をもたらし安寧へと導く」その為だけに彼は両親と引き離され皇城に繋ぎ止められていた。
幼い頃から魔術と皇国の歴史の分野に於いて帝位継承権を持つ者と同様、もしくはそれ以上の教育を施され、すべては皇国の為にと教え込まれた。

「辛いと思った事はありませんよ。そういう役目を負って生まれたのですから、そう生きるのは至極当然の事です。それが私の存在意義でもありますから。」

俯いて心臓の上に咲くその華の紋様をそっと指でなぞる。
記憶の中で最初に目にした時はまだ小さな蕾だった。
今では美しく華開いている。この紋様は異能と共に『開花』するようだった。

貴族の・・・公爵家の嫡子であるにも関わらず、その扱いは酷い物だった。
城から外へ出る事も叶わず、狭く閉じ込められた世界で「お前の命

は皇国の為だけにある」と教え続けられる。
何度も何度も繰り返し「死ぬときは皇国の為に死ぬのだ」と囁かれる。
重臣達も必死だったのだろう、クラウド心の負担などは何も考えていなかった。
ただクラウドという名の平和をもたらすモノが逃げていかない様に、自我を押さえつけ抵抗させない様にする事しか考えていなかった。

異常な環境だっただろうと思う。自分の精神が蝕まれていない事が不思議なくらいだった。
嫌だとか逃げたいとかは思わなかった。
皇国の歴史の、その光と闇を知る。
永く途切れる事の無い大河のような巨大な流れの中で、ちっぽけな自分に存在意義が在るだけで幸せだと思っていた。
皇城に居続ける理由はそれだけで十分だった。

無意識だろうか、笑顔を貼付け淡々と言葉を紡ぐその姿に、ラングルドは思わず小さく息をのむ。

「・・・・・俺が・・・・・陛下(あの女)の傭兵になるのと引き換えに出した条件でも、こればかりはどうにも出来なかった。」

俯いて、やっとの思いで言葉を絞り出す。解らない事が多すぎるのだ、不明な部分が多い「伝説」が相手では分が悪すぎる。
酔っぱらいから助けたあとに連れて来られた皇城の一室での事を思い出す。

『俺はこの先の一生涯を陛下(アンタ)の正式な傭兵となる事を誓おう。』
『その代わり・・・・・・・・・クラウドの・・・・・あの紋様を消す方法を探してくれ。』

あの時、彼女はその場で緩く首を振って「見つけられない。」と答えた。
恐らくサナトリシアはラングルドに言われるずっと前・・・・・・そう、自身が即位する前から探し続けていたのだろう。
だが未だに見つけられない・・・・・・否定の早さの理由はそういう意味だ。
彼女はラングルドから視線を逸らし、そばに控えていたヴァイネルを睨みつける様に見据えると、ヴァイネルは彼女を見て一瞬瞠目し、そっと瞳を伏せ見ていない事にした。
ふとした拍子に頬を伝う雫をみて、簡単に少女に押し付けようとした己の浅はかさを心の底から苦々しく思った。

彼女もまた皇国の重臣達が彼にして来た事を知り、無知で無力である事の罪深さに心を痛めていた人物だったのだ。

「ラングにはとても感謝しています。貴方がご自分の自由と引き換えに私を自由にしてくれたのは紛れも無い事実です。」

衣服を整えながらラングルドにそう伝える。

サナトリシアはラングルドの条件を別の方法で聞き入れた。
零れた雫をこっそりと拭うとヴァイネルに紙とペンと玉璽を持ってこさせ、何やら書き付けて印を押した。
紋様を消す為の模索は続ける。だが今出来る事はこれしか無いといって書き付けた物を渡されたのだ。
そこにはたった一行「勅令、クラウド＝フォン＝デュアリスに翼を与える」と書かれていた。

城から解放すると。自由だと。それは彼女の力でクラウドにできる最大限の事だった。

皇帝としての権限を無理矢理発動させれば大概の事に不可能はない。クラウドの任を解き宮廷に関わる全ての事から解放する事もできるだろう。

だが、クラウドが負う役目を考えると任を解き解放する事は皇帝が国を捨てるのと同じ意味を持っていたのだ。

だから任は『解けない』。

だが、「任を『解かない』代わりに城から解放せよ。」と元老院を脅した。

出来ない事を引き合いにして、尚かつ、暗に「承認しないならば国を見捨てる」と。

ラングルドが書面から目を離すと「やっと城から解放してやれる機会がきた。」と、そう漏らした。

「ありがとうございます。」

そういって深々と頭を下げるクラウドを見て現実に引き戻される。礼を言われる事なんか何一つしていない。出来ていない。

この友は一体どれくらいの苦痛を受けて来たのだろうか。

苦痛を苦痛と気づかないフリをする。それが凄く痛々しく忌々しかった。

「あれは、俺だけじゃない。ヴァインや陛下(あの女)も同じだった。同じ様にお前を気にしてた。」

そう言うとまだ水滴が滴る手をぐっと握りしめた。

「わかっています。私は幸せ者ですね。」
そう笑うと「洗ってきますね。」と言って水際へと歩いていった。
その背中を見ながら、決心した。
ー城についたらリヴァイシスとセフィルスと話をしよう。聞きたい昔話が有るのだと。
正直にすべてを話すかどうかはアヤシい相手ではあるが・・・・。

「もう一度水浴びしてくるかな。」

思考回路を冷やしたい。

「よし！　クラウド！　お前も入れー！！」

水際の小岩の上で自分は濡れない様に洗濯をしていたクラウドに、走りよって勢いの侭に腕を掴み・・・・・

「え・・・？　えぇっ？！　あっ・・・・・ちょっと・・・・まっ・・・・！！　うわっ！」

モノの見事に湖へ落ちた。
ずぶぬれになったクラウドは言いたい事が在りすぎるようで口をパクパクとしていた。

「ははは―。見事にずぶぬれだなぁー。」
「誰の所為ですかっ！」と言いながらぎゅうっと髪の毛を絞る。
「いいじゃねーか、ほら、俺だって水も滴る良い男だし。」

クラウドの抗議を冗談でかわし、ふふんと笑ってみせるとクラウドが吹き出した。

「そういうのは自分で言わないんですよ。」

ラングには敵いませんね。とおかしそうに笑う。

先ほどの笑顔とは違う。そう思うと何故か安心してラングルドも笑っていた。

ひとしきり笑い合い、洗濯をして、火をおこして・・・・・・・

そんな事をしていたら太陽はいつの間にか傾きかけ、辺りは綺麗なオレンジ色になりはじめていた。

「・・・・今日はここで野宿だな。」

水から上がり、衣服を干しながら焚き火にあたる。

空を見上げ呟く。

気の早い星が１つ茜の空に瞬いていた。

【7】（後書き）

感想など戴けましたら嬉しいです。

それにしても、何でルビが正常に表示されないんだろう・・・（汗

【8】（前書き）

長い・・・・かもしれない（汗

【8】

＋＋＋＋＋＋＋＋＋

目の前には背丈の倍以上はあると思われる真っ白な扉が威圧的にそびえていた。

「着いたねぇ・・・・・。」

「・・・・・・・・・。」

その扉の前でノホホンと暢気な口調でクライシスが呟く。

未だに彼の考えに不安が残るヴァイネルは無言で後ろに控える。

やはりもう一度釘を刺しておいた方が良いだろうか・・・・

そう思った時。

「あ。・・・・やっぱり。」「・・・・ヴァインもいるねぇ。」

ヴァイネルが何か言おうと口を開きかけると、後ろから声が聞こえた。

振り返るとクライシスとそっくりな男が2人、こちらへ歩み寄って来ていた。

「おや。ジュノシスとルヴァシス。どうしたの?・・・・散歩?」

クライシスがヴァイネルの横を抜け、ニコニコと二人に歩み寄る。

異常なまでのタイミングの良さだ。・・・散歩な訳有るか。
そっと心の内で毒づくと、まるで聞こえていたかの様にクライシスが振り返る。

「・・・ヴァイン？・・・そんな顔したら折角の男前が台無しだよ？」

トントンと自らの眉間を指し示してふわりと笑う。
「放っておいて下さい。」と言いそうになるのを何とか留める。
ーーまったくもって食えない殿下だ。
隠す事無く、そのままの感情を乗せて見返す。

満足したのか、クライシスはそのまま視線を前に戻し、二人を見ると
「よく解ったねぇ。」と満面の笑みを浮かべていた。

「クラウが来るならセフィルス様（この人）を何とかしなきゃって。ね？ルヴァシス？」

銀色の耳環の男が紅色の耳環の男を見てふふふと楽しげに笑うと
「そうだねぇ・・・」と答えが返る。

何となく予想は出来ていたが、あくまで予想であって欲しかった。
一体どこまで仲が良いのだ、この三兄弟は。
悪巧みまで同じタイミングなんて、面倒くさすぎる・・・。
ついさっきまでは1人だけ阻止すれば良かったモノが3人分になって、言い様の無い脱力感に襲われる。
ーだが。

「・・・クライシス殿下、ジュノシス殿下、ルヴァシス殿下。」

姿勢を正し、スッと腰を落として跪くと聖の間の扉を背にして非の打ち所がない完璧な礼を取る。

確かめるのなら今。
ここは一歩も引けないのだ。

精霊に皇国の鎮護を契約させている以上、宰相として精霊に手を出させるわけにはいかない。
精霊の王であるならば尚の事。

「不敬を承知の上で・・・今一度お訪ね致します。」
深く頭を垂れる。

「・・・御心は皇国と共にございますでしょうか？」

下げていた頭をあげ、跪いたままきっちりと3人を見据える。

ー『心は陛下の元に沿うているのか。皇国に仇なす心は無いか。』ー

皇帝の兄たちにそう聞いているのである、不敬罪としてその場で処刑されてもおかしくない。
だが、ヴァイネルも皇帝の為に、皇国の為に、この場で3人からの返答の内容に妥協する訳にはいかなかった。
ヴァイネルはサナトリシア(皇帝)のために簡単に命をかけた。

「うん。大丈夫だよ、ヴァイン。僕らは陛下(サーシャ)の意志には反したりしない。ただ、本当に話をしに来ただけなんだ。」
「そうだよ。心配しないで。僕らは陛下(サーシャ)が一番だけど、ヴァインの事も二番目くらいには気に入っているんだから。」

ジュノシスがヴァイネルを見てそう笑うと、ルヴァシスもジュノシスに賛同した。
クライシスが歩み寄って膝をつく
「ごめんね、ヴァイン。僕が変にはぐらかした所為でセフィルス様の為なんかに命をかけさせちゃったね。大丈夫だから。」
ね？と顔を覗き込まれる。
・・・・なんか・・・・って・・・・。やっぱりどこか納得していないんじゃないだろうかと訝しむと。
手を取られ立つ様に促される。
「ヴァイネル・・・・・。我らは神官であると供に、皇帝陛下の兄である。敬譲の精神をもって帝位継承権を陛下へお譲りした我らが、陛下に仇なす理由は無い。讒言や奸計をもって我らに取り入り陛下に仇なそうとする奸臣が居るとすれば、その者は予定より早めに人生に幕を下ろして頂く事となる。」
真っ直ぐに瞳を見つめ、「陛下に仇なさぬ」そう告げられる。
別人の様な口調であるが、これが本来のクライシスでもあった。
普段はフワリフワリとしているので想像もつかないが「皇帝陛下の兄」という立場で正式な発言をする場合はきちんと口調が変わる。
宰相を務めるヴァイネルとしては普段からそのようにしてて欲しいモノだと思わなくもなかったが、逆にそういうメリハリを付けている理由が解っていたので進言する事無く受け入れていた。
「・・・承知致しました。・・・・では、不束ながら私がご案内させて頂きます。」
もう一度深く頭を下げると、３人に背を向け白く重厚な扉を押し開

けた。

部屋の中はまぶしい程の白。
調度品は勿論、床から天井にかけて、すべてが白かった。

『・・・随分と部屋の前で話し込んでおったな。・・・・ヴァイネル。』

正面から聞こえてくる声。
銀髪碧眼の男が白く立派な椅子に座り肘掛けに身を預けてこちらを見ていた。
彼が聖の精霊、セフィルスである。
白銀の衣に身を包むその姿は、やはり精霊の王たる者にふさわしい出で立ちであった。

「セフィルス様をお訪ね致します時は、私も緊張致しますので。」

ー色んな意味で。と付け加えたいのを飲み込んで、にっこりと微笑みながら程よい場所まで寄ると跪き礼を取る。
相手は精霊の王で有るが故に、それは3兄弟も同様に敬意を払う。

「クライシス殿下、ジュノシス殿下、ルヴァシス殿下をお連れしました。」
『リン(侍女)が申しておったのはそなただけであったと思うが？』
「これは失礼致しました。申し伝えが不十分であったようで・・・・申し訳ございません。」

深々と頭を下げる。
衣擦れの音がして俯せた視界に白銀の裾が見えた。

『面を上げよ』

言葉の侭に顔を上げると、セフィルスはヴァイネルの傍らで眼光鋭く3兄弟の方を見ていた。
ーーなるほど、既に来訪の意図はご存知か。
そう思い、スッと立ち上がると脇へ退き跪く。

『神官が雁首揃えて何をしに参った。』
「さすが、ですね。その分では我らの申し上げたき事もご存知なのではございませんか？」

クライシスの瞳がセフィルスを牽制する。
ーー『神官』と言われたからには『神官』として答えよう。
言葉の端からそのように感じ取れた。

・・・・何故に喧嘩腰・・・・・・。
やっぱり納得していないではないか・・・・とヴァイネルは項垂れる。

『何の事だ。』
「おとぼけなさいますな。クラウドの件、ファルボックが絡んでおります故、ご存じない訳ございませんでしょう。」
クラウドの名を聞くとセフィルスの片眉が微かに上がったがあくまで瞬間的であり、クライシスに向ける視線は依然として厳しいままだ。

『それがどうした。』
冷ややかに見つめる。あくまでも最後までクライシスに言わせるつ

もりらしい。

「・・・・・クラウドが登城致します。決してお手出しなさいませんよう・・・・・。」

変に途切れる。

恐らくクライシスにとって、セフィルスには余り言いたくない言葉なのだろう。

『・・・・何だ、続けろ。』

口元に薄く笑みを浮かべ促す。

引き継ぐ様にルヴァシスが答える。

「・・・決してお手出しなさいませんよう・・・・。お願い申し上げます。」

ルヴァシスが答えた事によって若干興が削がれた様子だったが、それでも3兄弟に「お願いさせた」という事実に満足げに口元を緩めていた。

『何を申すかと思えば。いつも手を出す前に彼奴が逃れるのではないか。手を出してから言って貰いたいモノだな。』

くっと喉をならし、脇にある長椅子へと歩み寄り腰を下ろすと、ヴァイネル達にも他の長椅子に座る様に促す。

「そうなってからでは城が吹き飛びます。」

「陛下に嫌われますよ。」

「ラングに斬られても良いんですか？」

3人は口々に反論しながら指し示された長椅子へと座る。
やれやれとヴァイネルはため息をつき、お茶の支度をする為に少し離れる。

『何も無理強いをしている訳ではない。ちょっとからかっているだけではないか。』
「その度合いが間違っていると申し上げているのです。」
拗ねた様にいうセフィルスに、ジュノシスがピシャリと言い切るとクライシスが続ける。

「クラウドはライリーン様の魂の一部を宿しておりますから、ちょっとした仕草でライリーン様と雰囲気が重なってしまうのは致し方のない事かも知れません。ですが、逆に言えば「それだけ」です。セフィルス様とてクラウドの自虐的ともいえる性格は良くお解りのはずです。」
『・・・・・そうだな。』
「では、お約束頂けますか？」

ルヴァシスがセフィルスに問う。3人とも真っ直ぐにセフィルスを見る。
暫く3人を眺めた後、仕方なしというようにため息をつき、『解った。』と答えた。

『そのかわり・・・・・・。』
「ダメです。」

セフィルスが何かを条件にしようとしたとき、ヴァイネルが制しながら煎れたてのお茶をセフィルスに差し出す。

『まだ何も申して・・・・・』
「ですから、ダメです。セフィルス様のお考えは常時であれば学ばせて頂く事が多くございますが、クラウドの事となると有り得ないまでに短絡的でいらっしゃいます。・・・・・ここまで申し上げてもまだ仰りたいですか？」

ヴァイネルの思わぬ反論に呆気にとられ差し出されるままにお茶を受け取る。
三兄弟もヴァイネルは静観するだろうと思っていたので、彼の行動は想定外で口を挟むのを忘れた。

「まぁ、何も無く素通りというのもアレですから、登城のご挨拶位はお伺いする様に促しましょう。」
『あ・・・挨拶だけなのか？！』

不満そうなセフィルスを横目に、クライシス達にもお茶を配りながら続ける。

「それで御納得頂きます。」
『ま・・・まて・・・・・。』

ーーい・・・・言い切った。
クライシスをはじめ、皇帝の兄達はその顔を引きつらせた。
精霊の王に向かって言い切った。
表立ってハッキリとは言わなかったが、暗に「馬鹿（短絡的）だと思われたくなければ納得しろ」と脅したのだ。

「ご返答は。」
『う・・・。・・・・・解った。そなたの言う様に致そう。』

何かを言い返そうと思ったがキッと睨まれて飲み込んだ。
精霊の王の威厳も、クラウドの事となると形無しの様だ。

「・・・ヴァインってこわいね・・・。」「うん。怒らせちゃダメだよねアレは。」「僕達、来なくても良かったんじゃないの・・・？」

口々にコソコソ話をする。
解っていたけど怒らせると危ない人物ってやっぱり居るんだねと三人で結論づけて頷く。

当のセフィルスは、今になってやっと自分がヴァイネルを怒らせた事に気がついて、ぐったりと椅子に崩れた。

＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋

この広い皇城の中で、何千年もの永きに渡り主の居ない部屋があった。

主が居なくとも歴代の皇帝より許可を受けた者たちが入室し綺麗に管理されていたので、掃除も完璧で埃も無ければカビ臭さも無い。
更に室内に置かれているテーブルには常に瑞々しい果物が用意されており、今、この瞬間にでも主を迎えられる様に整えられていた。
ある種の異様とも取れるこの部屋への扱いに、誰が説明する訳でもなく「特別な部屋」という事は周知の事実であった。

しかし、そのように手入れをされている部屋なのに、その中は何と

も言えない空気で充満していた。
薄暗く、小さな窓が3つ有るが何れも猫が一匹通れる程の大きさで、どういう訳か昼間であっても採光の効率が良くない。
それは恐らく意図的に薄暗くされている様に感じる。

用意されている調度品はどれも重厚で黒光りしており、歴史を感じさせるクセに傷一つない。
石造りの壁を覆うかの様に幾重にもそこかしこに垂らされた黒い布地も、手に取ってみれば細やかな文様がびっしりと織り込まれ、裾の方には細い金糸と銀糸で刺繍が施されており、職人が長い年月をかけて丁寧に造り上げたのだと解る。
床に敷かれた黒い絨毯も絨毯と呼ぶにはそぐわない様な上等な物で、沈み込む様に柔らかく毛足の長さを変え幾何学的な文様が織り込まれていた。

その絨毯の行き着く所。
入り口のドアから正面に見据え、一段、小上がりになった所。

何かが現れたのだ。
そう、たった今まで誰も居なかった場所に。
暗闇から何かがじわりじわりと滲み出る様に徐々に実体化してゆく。
その輪郭は朧げであったが、その内にハッキリとその姿を形作っていった

部屋に見合うだけの重厚な椅子に座り、一人の女が肘掛けにしなだれかかる様に身体を預けていた。
白く透き通る様な美しい肌に黒く艶やかな長い髪が無造作に流れる。
部屋の様相が重苦しいだけに、その女の線が一層の儚さを醸し出す。

『・・・・やっと目覚める事が出来ましたわ・・・・。』

女の紅い唇が微かに動く。
それと同時に、室内の明かりが灯る。数が決して多くはないが幾分か明るくなる。

『この時をどれだけ待ち望んでおりました事か・・・・・・。』

とても重そうに頭をもたげ、閉じていた瞳をゆっくりと開いた。
深い紫色の瞳。

『ライリーン様・・・イルツィーネは貴女様の為に目覚めましたわ・・・』
『必ず・・・お側に参ります・・・・・もう少し・・・・お待ち下さいませね・・・』

そう呟くと、嬉しそうに目を細め口元を綻ばせた。
それはまるで愛しいものに向ける様な慈愛に満ちた表情だったが、気怠さがそうさせたのであろうか、そのまま目を閉じ肘掛けに身体を預けてしまった。

ーーかくしてこの部屋は何千年か振りに主を取り戻したのである。

そう・・・・魔の精霊　イルツィーネを主として・・・・。

【8】（後書き）

そして、また進みが悪い・・・ orz

詰め込み過ぎなのかなぁ・・・（苦笑

ご感想など戴けると嬉しいです！

【9】

＋＋＋＋＋＋＋＋

辺りは漆黒の闇に染まっていた。

あれから軽めの食事をとった後、交代で仮眠を取ろうという話になり、ラングルドは水から上がったままの半裸で剣を抱いて岩に寄りかかり、仮眠を取っていた。

衣服は既に乾いていたが、寒くないのだろうか、何か掛けた方が良いだろうかと思案しながらラングルドを見つめていたクラウドは、突然、言い様の無い感覚に包まれハッと空を見上げた。

「・・・イ・・・ルツィーネ・・・・・・？」

思わず零れた言葉に、ラングルドが目を開ける。

「・・・・クラウド？」

立てた右膝に右肘をつき、前髪をかきあげ、何事かとクラウドを見つめている。

「あ・・・・起こしましたか・・・す・・みません。」

「おい・・・・・。」

明らかに狼狽し何かを探す様に視線を彷徨わせる。

「・・・・・・・・・・・っ。」

「クラウド?!」

ラングルドと視線が交差した瞬間。
胸元の華に鈍痛が走り、服を握りしめてうずくまる。
心臓を鷲掴みにされる様な感覚に、苦しくなって呼吸が浅くなってゆく。

「な・・・んでもありませ・・・・・。」
「んなわけあるか！　おい!?　どうした?!　・・・・クラウド!!!」

跳ね起きて、クラウドの手首を掴み胸元から引き剥がして顔を覗き込む。
焦点の定まらない翡翠色の視線がラングルドを通り過ぎ、不安げに揺らめいている。

「・・・イ・・ルツィーネが・・・・・目覚めました・・・・・・。・・・早く・・・・・彼女に会わなければ・・・・・」

掴んだ手首が小刻みに震えている。
ラングルドから顔を背け、空を見渡し星を読むと皇都が在ると思われる方角を見て、うわ言の様に紡ぎ立ち上がろうとする。
慌ててもう片方の手首も掴み、浮かしかけた身体を引き倒し何とかその場に押さえ込んで、問いただす。

「イルツィーネ?　あの、伝説の魔女か?!」

建国間もないヴェルドニアを破滅へと導こうとした伝説の魔女。
『魔の精霊　イルツィーネ』

「ラング・・・違うんです。彼女は・・・・何も知らないんです・・・。あの時も・・・・・。ただ純粋だっただけで・・・す。」

波の様に押し寄せる息苦しさにラングルドの肩に額をつけ、浅い呼吸を必死に整えようとする。

余りの苦しさに涙が滲んできた。

何故、イルツィーネの存在を感じた瞬間に華の紋様が疼くのだろうか。

何故、「あの時」と言ったのだろうか。

何故、何故・・・・

解らない事が多い・・・・繋がりそうな気がするのに思考が纏まらない。

皇国の歴史については恐らくこの国でもトップクラスの知識量だろうと自負している。その知識を引っ張り出して来てもイマイチ符合が合わない。

もしかして、まだ他に何か有るというのだろうか・・・・。セフィルス様やリヴァイシス様がお話下さらない何かが・・・・。

ーー彼女に会わなくては・・・・・。

少し時間が経つとクラウドの呼吸は徐々に落ち着いて来た。

呼吸はマシになったとはいえ、手はまだ震えている。

肩を貸しているが、他に為す術も無く・・・・・掴んでいた右手を離し、クラウドの背後にある暗闇を睨みつけてそっと背中を摩る。こんな事をしても気休めにもならない。だが、それしか出来ない自分が歯痒くて仕方が無い。

「大丈夫です・・・・もう・・・・大分落ち着いてきましたから・・・・。」

そういってラングルドの肩から額を離した。
弱い部分を見られてちょっとバツの悪そうな顔をしていたが、微かに微笑んだのを見て小さく溜め息をついた。

「ご心配をおかけしました。・・・・・私も初めての事でちょっと取り乱してしまって・・・・すみません。」

ご迷惑を・・・・と続けようとする。

「クラウド。お前、気の遣い方が間違ってる。」

最後まで言わせる前に遮る。
握っていた左手を離し立ち上がると下衣についた土を払い、ついでに洗って干していたサラシを手にとってクラウドを見おろす。

「こういう時は笑って「ありがとう」って言えばいいんだ。別に迷惑なんか掛かってねぇし、友人なら心配するのは当然だ。違うか？」

翡翠色の瞳が驚きの色を称え見上げる。今度はちゃんとラングルドを映していた。
それを確認すると手にしたサラシを腹に巻き始める。

「あ・・・・ありがとうございます・・・・。」
「どーいたしまして。」
やはり貴方には敵いませんね。と苦笑しサラシを巻くのを手伝い始める。
暫く2人で巻いていたが、腹はクラウドに任せた方が早いと思ったらしく、自分は両手のサラシ巻きに専念する。

巻き終わると着込みをモソモソと着る。
小手を嵌め、バングルを付け、皮の外套を着る。
前を合わせ、皮の腰帯と帯剣用の帯を締める。

きっちり着たかと思うと、徐に屈伸やら腕回しをして程よく着崩して軽く整える。
コレくらい着崩れてた方が動き易い。

「俺が起きてるから、お前は少し休め。」

焚き火を挟んで正面に座ると、2、3本薪を足しながら言う。
「あぁ、そうだ。そこの袋に掛け布が入ってるから使え。」といって薪で革袋を示す。
言われた様に革袋から薄めの掛け布を引っ張り出し、すっぽりと頭から被る。
自分の上着を畳んで枕代わりにすると身体を横たえた。
「ふふ。・・・・なんか、いいですね。二人で旅をするって言うのも。」
いつもは皇都まで一人だ。

一人旅が怖いと思った事は無かったが、時折、寂しさは感じていた。
それは、ルルドに住む様になってから感じた事だった。人との触れ合いが感じられないのが酷く心細く感じる様になったのだ。

城に居た頃はそんな事を考えた事も無かったのに。
城が嫌いだったから寂しいと思わない訳じゃない。ただ、心の底から「楽しい」と思った記憶がないのだ。

勿論、城でも人の好意に触れる事は有った。
サナトリシア様やクライシス様達が重臣や監視の目を盗んで良く様子を見に来てくれていた。
ヴァインも何かと気に掛けてくれていたし、シオンは時折、コッソリと城の外へ連れ出して色んな物を見せてくれた。
セフィルスは度々ちょっかいをかけてきて、朝起きると何故か同じ寝台で寝ていたりとかした。

・・・・一部、「好意」の意味が違う様な気がするが。

でも、他の事が余り思い出せない。
知識とか身近な人との触れ合い。そう言う事は覚えているのに、何をして日々を過ごしていたのか・・・・「日常」というものが全くと言っていい程思い出せなかった。
それは何だかとても不安定な感じがしたのだが、そう思う一方で何故か思い出せないという事に安心している自分も居た。

だから離れる事になっても未練とかは無かった。

「・・・そうだな。クイントス(皇都)までであと2日はかかる。しっかり寝とけ。」
「・・・は・・・い・・・・・。」

きちんと干しているのだろう、太陽の匂いがする掛け布にくるまり、意外とマメなんですねぇとか思いながら徐々に意識を手放していった。

寝息が聞こえ始めた頃。

「・・・・・・・・・・・・・・クラウドに気取られないとは流石だな。」

そう言って徐に正面の闇へと目をやると、暗闇が薄く光りユラリと人の形を示す。

『・・・一応、これでも王だからな。そなたこそ、無能の割には勘が良いな。』

ラングルドには目もくれず、そっとその場に屈みクラウドの頬をなでる。

その様子に僅かに眉をひそめる。

「・・・・・・・・あんな状態だったのに黙ってみてやがって・・・・・・何しにきやがった。」

ーーくだらねぇ言い訳なんかしやがったら・・・・ぶった切ってや

る。
明らかにそう語る紅い瞳をセフィルスは冷ややかに見返す。
『好き好んで黙って見ておった訳ではない。華(これ)の紋様の及ぼす影響に私は干渉出来ぬのだ。』
ふーん。と訝しげに「王」の表情を読む。嘘はついていなさそうだが、同じ位の確率で何かを隠していそうな感じだ。
「まぁ、城を離れてここまで見に来た努力は認めてやるよ。本来なら鎮護の精霊は媒体が在る場所から離れる事が出来ない筈だからな。」
精霊の王、セフィルスはじっとクラウドの寝顔に見入っている。
セフィルスが城を離れられない理由。それは彼が皇都を守る精霊だからだ。
皇国の鎮護は４大精霊が担っているが、更に強固な物にする為に皇都には別の鎮護として、聖の精霊がその役目を負っていた。
『・・・イルツィーネが目覚めた。そなたには・・・この事の重要性が解らぬのであろうな・・・・・。』
クラウドの髪をそっと撫でて立ち上がると、ラングルドを見据えた。
闇の中に居ても尚、その荘厳な姿は輝きを失わない。
精霊の王は生まれながらにして王というが、なるほどね。と納得する。
４大精霊最強と言われるファルボックは実体を伴って飛んで来れないが、セフィルスはその上を行く強大な力で簡単に実体を伴わせる事が出来たからだ。

「・・・あぁ、解らねぇな。・・・・・はっ・・・・・解りたくもねぇ。どいつもこいつも自分勝手な事ばかり抜かしやがる。」

剣を掴んでゆらりと立ち上がる。

「・・・・・・・・・・もう我慢ならん。」

ギリッと奥歯を噛み締め、セフィルスを睨みつける。

「・・・・・ライリーン（重荷）の紋様を背負わせるくせに、隠し事ばかりだ。辻褄があわねぇんだよ！　伝説とやらだけが説明の全てだとするとな！・・・・・平和と豊穣の約束？・・・・はっ・・・・笑わせる。そんなもん、誰かから与えられるもんじゃねぇだろう！　自分たちが汗水垂らして試行錯誤して苦労して手に入れるもんだろ！　体裁のいい言葉を並べ立て、さも・・そうであるかのように尤もらしい伝説なんぞ作りやがって！　どれだけコイツが苦しんでると思ってるんだ！！」

ふざけるな！・・・・・・思っていた事を全て叩き付けてやる、ゆっくりと剣を抜き、切っ先をセフィルスに向ける。

「アンタ、コイツが生まれた時から知ってるんだろ？！　なんで黙って見てやがった！」

クラウドが精霊に「様」をつけるのはセフィルスだけだ。
それはセフィルスが「精霊の王」という事以上に、それだけ敬愛し心の拠り所にしているという現れでもある。

それなのに。
命に関わる様な事態に陥っていたのに、何故「見てた」？！

干渉出来ないって何だ?!

『・・・・・そんな事に答えさせたいのか?・・・・・・気が進まぬが・・・・まぁ良いだろう。城に来たら答えてやる。尤も・・・・人間であるそなたに、我ら精霊の道理が理解出来るとは思い難いがな。』

そう言って壮絶なまでの妖艶な笑みを浮かべて嗤うと今一度、クラウドに視線を落とし何か呟いて闇に溶けた。

「まったく・・・本当に何しに来やがったんだか・・・・・。」

呟いて剣を収める。

ー城に来たら答えてやる。

「答えてもらおうじゃねぇか。洗いざらい全部。」

【9】（後書き）

まだ皇都に着きません（汗

ごめんよファルボック。

【10】

＋＋＋＋＋＋

ヴァイネルが退室したあと、フェリシアはサナトリシアの執務着を寝間着に着替えさせると寝台に入る様にそっと促した。

「済まなかった・・・・・」

寝台に横になりながら側に控える女官長に謝る。
調べる事に必死になり過ぎて心配してくれる者の気持ちまで考えが至らなかった。
人の上に立つ者として周囲への配慮が足りなかった点は多いに反省すべき事である。

「いいえ・・！いいえ！陛下。・・・　私の方こそヴァイネル様に・・・・。申し訳ございません。」

寝台の脇へ寄り、両手を胸の前に組み合わせ腰を落として跪くと頭を下げる。
彼女の仕草は何気ない事の一つ一つにおいても洗練され、とても優美に見えた。
その動きに少し見とれた後、徐に口を開く。

「フェリシア・・・そなたに心配をかけた・・・・。・・・・どのような罰を受けようか？」

身体を起こし、広いベッドの上を這って端に腰掛けると手を伸ばして彼女の頬に触れた。

矜持が高く自分より少し年下の彼女の事をサナトリシアは妹のように可愛がっていた。
その彼女にヴァイネルに泣きつくような真似をさせてしまったということは、何か代償を支払わなければ気が済まない。

「そんな！罰だなんてとんでもございません！　全ては私の不徳と致す所にございます！　陛下は何もっ！」

弾かれた様に顔を上げ、真摯な眼差しで見つめてくる。

「私が悪いのでございます。ヴァイネル様が聡明な御方という事を失念し、うっかり表情に出してしまいました・・・・・」

俯いて「申し訳ございません。」と謝る。

ーーうっかり・・・・。

フェリシアの言葉にハッとした。

・・・・・やられた・・・・・。

ヴァインめ・・・・「泣きついた」だと・・・？

「うっかり泣きつく」なんて事は無いだろう。
サナトリシアに関する事では並の追求でフェリシアが口を割るとも思えなかった。
フェリシア相手に無体を働くとも思えぬが・・・一体どのような追求をしたのだ。

フェリシアはヴェイネルに泣きついてなど居なかったのだ。
ただ、困ったような表情を見られてしまい、そこを突かれただけのこと。

要するに2人とも、体よく利用されたのだ。
フェリシアは、大方「陛下に何か有ったらどうするのです」とか何とか、脅しに近い事を言われたに違いないし、
サナトリシアも「フェリシアが泣きついた」と言われたから従う気になった。

単純ではあるが、それ故に鮮やかすぎてぐうの音もでない。

彼は従順な妻がサナトリシアに謝罪する事も、それによって自分がついた小さな嘘がバレてしまう事も、すべて見通している。
それを追求すればまた、フェリシアが責任を感じる事、そして、「泣かさぬ」と誓った手前、サナトリシアが自分を追求してこないと彼は解っているのだ。

今更ながらに有能な宰相の抜け目の無さに驚いた。

「あの・・・陛下・・・？」

声にハッとすると、無意識にフェリシアの頭を撫でていたのに気づく。
ついでと言わんばかりに縋る様にそのまま引き寄せて抱きしめる。

「へ・・・陛下・・・？」「サーシャと。」「・・・サーシャ様？」

戸惑う彼女に「友」の名で呼ぶように言う。その声が静かに優しく心と鼓膜を打つ。

こうして想ってくれる者達が近くに居る。

ーー・・・・・弱音は吐けない。大丈夫だ。まだ前を向ける。立っていられる。

心を奮い立たせ、そっと身体を離す。

「・・・・すまぬ。暫しヴァイネルを借りる事となりそうだ。今更かと怒られそうだが、ファルボックの一件の他、クラウドに関する事は妾の人生を賭けた所で簡単に片付く物ではないと認めよう。そなたの夫に助力を願うとする・・・。」

フェリシアを見つめると、「はい。」と笑顔で答える。

きっと、この仕打ちはそういう意味なのだろうと漠然と思い至る。

やはりヴァインは有能だ。

彼がその気になったらこの国は簡単にひっくり返されるのだろうな。と思う。

それに引き換え・・・・己の無様な体(てい)たらくはどうしたモノかと微かに自嘲の笑みが漏れる。

ふと聞いてみたくなった。

自分以外の人間は建国の歴史と伝説についてどう思っているのだろうかと。

この国の国民が生きているうちに何度と無く触れるであろう建国にまつわる伝説。

殆どの者がただ漠然と受け入れ、何も疑問を持たないのだろうか。

疑問符ばかり浮かぶ自分が間違っているのだろうか。

真実と虚偽と伝説と史実が複雑に絡み合い、溶け合っている。

「・・・・フェリシア。もし・・間違った伝説の上に、この国の平和が成り立っているとしたら、そなたはどう思う・・・？」

「？」

フェリシアは決して頭の弱い女ではない。

グランディス家の乳母の娘であるが、先代当主で・・・・ヴァイネルの父の意向で現当主のヴァイネルと分け隔てなく教育を施されていた。

いずれは息子の嫁に、皇女の侍女にと考えた上での事だろう。

容姿や物腰に若干のあどけなさが残るので惑わされるが、確実に聡明な女性の部類に入る。

だからこそ、歳若くともサナトリシア付きの女官長という役職に抜擢されているのだ。

その聡明な彼女が首を傾げる。

「フェリシア・・・・クラウドの事は知っておるな？」

「はい。ライリーン様の魂を宿した御方と・・・・」

「あれの役目は？」

打てば響くような気味の良いテンポの返答に、最後まで聞く事無く次の問いを投げる。

「伝説のままに申し上げれば・・・・・平和と豊穣をもたらして下さる使者・・・・・」

フェリシアは「なぜ、皆が知っている伝説の内容をお聞きになるの

かしら？」と不思議に思いながら答える。

「そう・・・伝説が誠であればな・・・・。」

寝台から腰を上げ、裸足のままで床に降り立つ。

上履きをと勧めるファリシアを片手で制して、そっと窓際へ歩き出す。

「・・・と申しますと・・・？」

そっと背後から上着が掛けられる。

「そなたは不思議に思うた事は無いか？ーー」

「『使者』とは『誰からの使者』だ？」

「建国されて３０００年になろうとしておる。なぜ、今、ファルボックの水晶が壊れた？」

「なぜ『始まりの皇帝』のリヴァイシス様がいらっしゃるのに『伝説』なのか？」

サナトリシアにしてみれば珍しく興奮気味にまくしたてる。

「なぜ、セフィルス様もリヴァイシス様もクラウドを助けて下さらない？」

言葉にする程に自分の無力さを思い知り、言い様の無い悲しみに襲われる。

何故！何故！何故！・・・・・・・・・・そればかりしか言えないのか。

と。

「サーシャ様・・・・・・」

そっとフェリシアがサナトリシアの背中に寄り添う。

「妾は弱いのぅ。このような様(ザマ)では大切な者を護れぬやもしれぬ。皇帝になれば少しは強くなれるかと思うておったのだがな。一人では何も出来ぬ。」

カーテンを握りしめ下唇を強く噛む。そうでもしなければ簡単に泣いてしまいそうだから。

そう、あの時も悔しさで自分は泣いた。

込み上げてくる涙を零さぬ様にヴァイネルを睨みつけ、必死だった。

「私は伝説の事は人並みにしか存じておりません。全てが真実であるとは思いませんし、偽りであるとも思いません。」

「・・・・ですが、1つだけハッキリと申し上げられます。私に出来る事はとても少ないですが、私の大切な方々が幸せであってくれたら良いと思っております。」

背中に響くその言葉がじわりと心に響く。

意を決した様にきゅっと背中の衣服が握られる。

「サーシャ様はご自身が思われる以上に頑張り過ぎです。ヴァイネル様もご心配なさっています。私にもサーシャ様のご心痛をお分け下さい、お傍におりますのに何もさせて頂けないのは身を斬られるよりも辛いです。」

そういわれてからやっと気がついた。

自分の中にある消化しきれない焦燥感と同じものを大切なフェリシアにも与えていたのだと。

それがどんなに辛い物であるか自分自身が一番解っていた筈なのに・・・・。

「妾は・・・・もう一度そなたに謝らなければならぬな。」

振り返ろうと身じろぐと背中に張り付いていたフェリシアが離れた。

「・・・・いいえ、謝罪は必要ございません、陛下。」

「・・・・・・・・・？・・・・・・・・ふむ、・・・・・・フェリシア、夫婦とはよくよく似てくるものよの。」

にっこりと笑って言う彼女のその笑顔にふと思い至り、「ありがとう。」と囁く。

「あぁ・・・・でも「意地の悪さ」まで似てもらっては困るぞ。ヴァインは有能だが相当の食わせ者だからな。そなたの前では隠しておるようだがの。」

そういうと一拍空いて、二人で顔を見合わせて笑った。

フェリシアは「暖かいミルクをお持ち致しますね」といって用意の為に部屋を出て行った。

彼女が居なくなると途端に部屋が広く感じた。

いつもはそれが少し憂鬱だったのだが、今はそう感じない。

先程のやり取りで心が温かいからだろうか。何だかとても満たされ

ている気分だった。

今、自分が感じたこの心の温かさと安らぎ・・・・クラウドにもいつか訪れるのだろうか。
願いというよりも、もはやこれは祈りに近いなと思う。

皆、自分を心配してくれている。解っていた筈なのに、今更再認識するとは。
自分で思っていたよりも自分自身を追い込んでいたという事か・・・・
大丈夫だという自信は有ったのだがな・・・・。
見ている立場としては居たたまれなかっただろう、もし自分が逆の立場であったらヴァインと同じ事をしそうだ。
思考というのは夫婦どころか主従関係でも伝染するのか。

だとしたら、やはりヴァインは食わせ者だ。

一人でグルグルと思案し、そう言う結論に達すると、自然と口元が緩んだ。
窓の側を離れ、長椅子に腰掛けると『天地の境界』と名付けられている作者不明の壁一面の巨大な絵画を眺めた。

題名の通り天地を作る創世の絵だ。
まず光が生まれ、闇が生まれる。そして天が出来て、地が造られる。
光は２つに分裂して光と聖となり、闇も２つに分裂して闇と魔となる。聖が火、水、風、土を造ると魔がそれを天地の境界へと導く。
導かれたエネルギーは各々の能力を他と混ぜ合わせ様々な生命を造り育んでゆく。
聖と魔は相反しながらも相互的に不可欠であり、聖は造るだけの力ではなく時として破壊もする。
魔もまた闇を持って心を惑わせるだけの力ではなく、安らぎと休息

を与える。

この世の有るモノは何一つ無駄は無く、全てが必然であり必要であるという事を物語の様に描いている。

とても立派な絵画だ。

今頃ヴァインはセフィルス様とやり合っているのだろう。
ヴァイン本人は知らないと思うが、彼はセフィルス様にかなり気に入られている。
あの部屋に入る事を許されるのが何よりもの証拠だ。
というのも、基本的に精霊の王の居室は王が入室を許した皇族以外の人間は入室出来ない。下手すると皇族であっても入室出来ないのだ。そんな中で入室を許されているのだから特例的とも言える。

まぁ、精霊の王の好き嫌いが原因で諍いが起きるのも面倒なので、表面上は「扉が開かない時は運悪く不在」という事になっており入室出来る条件は皇帝と神官しか知らなかったりする。

ーーコンコン。

「入れ。」「失礼致します。」

ワゴンを押してフェリシアが入室する。
「陛下、ミルクをお待ち致しました。暖かいうちにお召し上がり下さいませ。」

微笑んでそっとカップを手渡してくれる。

「すまぬな。」
「少しお菓子なども用意して参りました、如何致しますか？」
「折角だ、少し戴こう。そうだな・・・・お茶の時間という事にしよう。そなたも一緒に食べるがよい。」

そういって向かいの長椅子へ促し、ポットに入っているミルクをカップに注いで手渡す。
フェリシアは恐縮しながらも少し照れた様に「ありがとうございます」と笑って席に着く。

この時間がいつまでも続けばいいのにと、柔らかく微笑んでくれる目の前の主を見ながら、心からフェリシアは思った。

【11】

＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋

『・・・・・・。イルツィーネ（イル）が目覚めたか。』

太陽の様な色の髪を揺らし、高座に座した男は肘掛けに右肘をつき、さして興味もなさそうに呟き小さく溜め息をついた。

『ファルボックの水晶・・・・・・・・流石にライリーンの一部となれば過剰反応もやむなしか・・・・』

全く、厄介な事ばかりだ。肘掛けを指先でトントンと打つ。
それでなくともクラウドには相当な負担がかかっている。
本人に自覚は無いかも知れないが、彼にはその役目柄、皇国を守護する水晶が受けるダメージがそのまま伝わる。

まぁ・・・・ファルボックはそれなりに役に立っているようだが。

火の精霊を思う。真っ直ぐで烈火の様な激しい気性で扱いが難しいが、唯一、クラウドには従順だ、故に盾にもなりうる。
力の強い４大精霊でも無理だったか。まぁ、セフィルスもそう思ったからこそ自身が皇都の鎮護に就いているのだろうが。

イルツィーネが目覚めれば「闇龍（ラグナード）」が目覚めるのも時間の問題だろう。
結局、何も解決していないのだ。あの時から。

そして、やはり何も変わっていなかった事に気づくのだ。イルツィ

ーネの想いも、ライリーンの想いも、セフィルスの想いも何一つ。

『純粋故に己を滅ぼす・・・・なかなか報われぬものだな、イルツィ(ルィ)ーネ。・・・・・・居るのは解っておる。出て来い。』

氷の様に蒼い双眸が正面を見据える。

『・・・・リヴァイシス様。』

じわりと闇色が広がり一気に凝縮すると人型になった。
足下に跪き頭を垂れる。

『顔を上げよ。・・・・・なぜ目覚めた。』

冷ややかにそう問う。責める。

ー眠っておれば良いモノを。

正直、この女は好かない。純粋なのは良い事なのかも知れないが、
それ故の愚かさが付きまとう。
おおよそ「魔」の称号とは似ても似つかない性格なのも苛立つ要素
である。

『私にも解りません。本当は・・・・・』
『目覚めたくなど無かったのか・・・・・。』

言葉を被せるリヴァイシスに悲しそうに微笑む。

『・・・・リヴァイシス様。あの時のイルツィーネ(私)の中にツィーネ(もう一人の私)
が生まれました。

イルツィーネ（当時の私）は愚かにも、何故あの時にもう一人（ツィーネ）の私が生まれたのか考えなかったのです。
そればかりか、何の疑いも無く元の名の「イルツィーネ」から「ツィーネ」の名を与え、友が出来たかの様に喜んでいたのです。リヴァイシス様は気をつけろと忠告して下さっていたのに・・・・・』

『私が自分の想いに捕われたりしなければ・・・・・もう一人（ツィーネ）の私が生まれた理由にきちんと向かい合っていれば・・・・・このような残酷な伝説など生まれなかったのに・・・・・ライリーン様がお命を落とされる事も無かったのに・・・・・。』

紫色の瞳が苦痛に歪み、雫がこぼれ落ちる。なぜ想いは噛み合ないのか。必死に追っても届かない思い。
なぜこんなにも苦しいのか。

『・・・泣くな。』

視線を彼女から逸らし、苦々しい想いで自身の吐く言葉をかみしめる。
肩を震わせ声を殺す様が不愉快だと。そう思った。
自分を責め続けるその姿に苛立つ。愚かな女だ。

『・・・・・お伝えしなくてはならない事がございます。』

そういうとリヴァイシスを正面から見据える。
涙に濡れたその紫色の双眸は先程の危なげなものとは打って変わって、強い意志が見え隠れする。
『ツィーネは突然引き寄せられ私の中から消えました。きっと良くないことが起こります。』

その必死の眼差しに偽りの色は無く、むしろ狼狽え焦っている様にも見える。
侮蔑と冷ややかな視線はそのままに、ため息をつく。

『・・・人間が関わっている可能性は。』
『・・・無いとは言い切れませんが、確証もございません。』

リヴァイシスは何が根底に有るのか聞きたいのだろう、引き寄せられた原因が「人為的である」のか「運命によって起きたこと」なのか時期が時期なだけに判別が付けにくい事柄だった。

『ライリーンは封印の際に永くはもつだろうが永遠ではないと言っておった。今年は３０００年の節目になる。』
『・・・・・はい。』

俯き消え入りそうな声で返答する。その封印の時の記憶がイルの中に鮮やかに甦る。
血、薬草、香の混じり合う匂い。
鮮血に染まる方陣のなかに、微動だにしない細く白い肢体。
何度叫んでも、何度呼んでも応える事の無かった・・・・・・・・。

『・・・・・・・・華紋様を持つ者もいる。』

その一言に捕われかけた思考が一気に現実へ引き戻される。
勢いよく顔を上げる。華紋様を持つ者。その役目。その意味。

『い・・・・・今、何と・・・・・何と仰せですか?!』

瞠目。蒼白になり、そう問う唇が戦慄く。

高座から立ち上がり冷ややかに彼女を見下ろす。

『デュアリス家の者に華紋様を受けた者が居る。』

金刺繍が施された衣の裾を捌き、イルの側に寄ると片膝をつく。細く白い頤に手を添え仰向かせると、その瞳が大きく揺らめいた。

『・・・・・・・死ぬ為だけに生まれた者だ。』

『お前の愚かさが招いた禍々しい伝説は、伝説の領域を超え、時を超え、お前以外の者に苦痛をもたらさんが為に脈々と受け継がれるのだ。』

息を飲むのが解った。揺らめいていた瞳は完全に絶望の色を湛える。その様子を見てリヴァイシスは満足げに口元を歪めた。

ーー苦しめば良い。

どこかでそう言う声が聞こえる。

最愛の妹は目の前で自ら生け贄となり道具の一部となった、己も彼女の異能を繋ぎ止める為に昇華する事を赦されない身となった。

その元凶がこの女だ。

どうせこの女も死ねない。ならば延々と続く苦しみを与え続けてやりたい。

その心の柔な部分に鋭利なナイフを突き立て続けてやりたい。

身の内に滾るどす黒いモノが『お前が死ねば良いものを。』

そう囁く。

澱みに耳を貸すべきではない。彼女だけが悪い訳ではない。
ギリギリの所でそう言い聞かせる。

『・・・・・・・どんなに想っても・・・・・お前の想いは届かぬ。』

そう彼女の耳元に囁くと、掴んでいた頤から手を離して立ち上がった。
古に交わした契約を見届ける者として、精霊を使役する者として、凛として言い放つ。

『言いたい事が有るのなら行動で示せ。・・・・・忌まわしき伝説からデュアリス家の者を解き放ってみせよ。』

今まで、幾度と無くその耳に残酷な言葉を囁きかけても、どんなに心を痛めつけても彼女は折れなかった。
その強さはどこから来るのだろうかと不思議に思う。

『・・・・畏まりました。この身に変えても必ず・・・・・』

蒼白の顔面のまま、綺麗な礼をとり闇色の霧となって消えた。

やはり、あの女は好かない。
泣けば良いものを、縋れば良いものを、一切しない。

純粋で、愚かで、傷つき易いくせに・・・・・・・・・甘える事を許さない。

・・・・・・気に入らない。

その心の奥に秘めた華を毟り取り、叩き付け、踏みにじってやりたい。

美しい物を見た時に感嘆する一方で、無惨に破壊してしまいたいと思う気持ちに似ている。

壊した後に満足するのか、それとも不満を覚えるのか・・・・どちらにしても余り気分が良い物ではなさそうだと自嘲する。

のろのろと高座へ上がり据えられている椅子に腰を下ろすと溜め息をついた。

まだ鮮明に残るあの記憶。まだ・・・・人として生きていた頃の遠い話。

それは「伝説」として伝えられていたが、自分たちが見た事実とは違う。

そんな輝かしい物ではなく、人間特有の醜く愚かで美しいもの。

龍が現れ、「人間の女が自身の異能の力を以て荒れ狂う龍を鎮める」という話。

だが実際は・・・・

「人間の女が自身の血肉を以て荒れ狂う龍を鎮める」。

そう、生け贄だ。
そして、その「人間の女」は自分の妹。
その龍はツィーネが生み出した「闇龍」

セフィルスを想うが故。セフィルスを憎み恨んだ気持ちが形を為し、彼が契約する国「ヴェルドニア」を襲った。
龍が現れた場所は火が荒れ狂い、水は汚染され、風は病原を運び、土は死んだ。
次々に村や街が壊滅的な被害を受けていったが、皇国は何も出来なかった。
精一杯の抵抗、必死の救援、どれも追いつかないのだ。

もうダメだと、皆が絶望した時、彼女は言った

ーーー私がこの身を以て封印致します。

あの龍は心の闇、立場が違えば自分がそうなっていたかも知れないと悲しそうに微笑む。

皇帝の妹という立場。精霊の王という立場。
「受け入れられない」とセフィルスの想いを拒み続けた彼女は、死の間際にしてようやく受け入れる気になった。
それはとても残酷で身勝手で・・・・・・でも、優しかった。

受け入れるが、叶うのは瞬く様な一瞬。幕を引かせる為に受け入れる。
自分が居なくなった後、少しでも苦しみが和らぐ様に。

自分の想いは一言も口にする事無く。胸に秘めたまま死の淵へ降り

ると言う。
彼女の想いを少なからず知っていただけに、歯ぎしりしたくなる様な苛立ちを覚える。
建国より１０年、すなわち彼女が密かにセフィルスに想いを寄せて１０年。
近づき過ぎず、存在を感じる距離で・・・・・・・見ているだけで良いのだと、常に微笑んでいた。

やりきれない。

感傷に浸る心を無理矢理に現実へ引き戻して、奥歯を噛み締める。
現在伝わっている建国の伝説はそのままラグナートの伝説に繋がる。
実際には１０年の開きが有る筈だが、長い長い歴史の間に要約され融合してしまった。
それは恐らく、語る者と聞く者が都合よく解釈して装飾され割愛されていったのだ。
おかげで現在、正確に伝説を伝えられる者は生きている人間には一人も居ない。

知っているのは精霊達と自分。
だが、リヴァイシスは教えたり訂正してやる気は全くなかった。
自分の子孫の愚かさにうんざりしていた。

血腥く忌まわしいあの出来事を、己達の都合で光り輝く様な伝説に作り替え、また新たに生け贄を作り出す。

苛立ちに任せるまま、手元の剣を掴むと思い切り扉へと投げつけた。

教えてなどやらぬ。

【12】

ーーコンコン。

扉を叩く音が聞こえた。

『・・・・・・・・。』

この気配は・・・

ーーコンコンコン。

先ほどよりも何か込められている様な叩き方だ。

『・・・・・・・・・。』

ーーガンッ！！！

「失礼致します。」

文字通り、ドアを蹴破って入って来た。

『・・・ 行儀の悪い。』と呟くと眉根を寄せ、その人物を見る。

「・・・・ 剣を扉に投げつけるのも行儀が悪いうちに入ると思いませんか？・・・・・・・リヴァイシス様。」

扉に刺さった剣を横目に、カツカツと神経質そうな音を響かせて足下まで寄ると、スッと腰を落とし礼を取る。

『・・・・ 地獄耳め。相変わらず口が減らんな、ヴァイネル。』
リヴァイシスの厭味に、許されても居ないのに顔を上げ「御陰さまで。」と満面の笑みで答える。
『用件は解っている。クラウドが来るのだろう。白い馬鹿が落ち着き無い様子だったからな。』
「いくらセフィルス様がお嫌いでも「バカ」は言い過ぎですよ。」
『ふん。お前も人の事言えないだろう。』
「違いますよ、私は「好きじゃない」だけですから。」
『大して変わらんわ。・・・ったく。知りたくもない胸の内を、強制的にダダ漏れで聞かされる身にもなれ。』
うんざりとした様子で背もたれに寄りかかる。
「・・・・・・・ お茶でもお煎れ致しましょうか？」『あぁ。濃いめに。』
気分転換を促すために提案すると、珍しく注文が付いた。
畏まりました。と頭を下げ、脇にある茶器の元に寄り、用意を始める。
宰相でありながら侍従の用な事も抵抗無くこなせる。
頭脳明晰な上に、実は見た目とは裏腹に剣の腕も相当。
そういう男は貴重だ。
『で。どうしろと。』
その様子をじっと見つめながら反応を待つ。

「リヴァイシス様に対しては特に何もございません。ただご報告に参っただけですので。」

茶器から目を離さずに返してくる。茶葉がポットに入れられゆっくりと湯が注がれる。

その言葉の裏に暗に示すはセフィルスへの牽制。

茶葉を開かせる為にユルユルとポットを回す

『なるほどな。・・・まぁよい。程々の所で動いてやる。』

「そうして頂けると助かります。」

カップへ注ぐと仄かに香りが立つ。

ソーサーに乗せ、砂糖も何も添えぬままそっとリヴァイシスに差し出すとカップだけを取られた。

『宰相であるお前に話しておくことがある。』

少し離れた長椅子に腰を下ろす様に指すと一口お茶をすすり、脇の台へ置く。

「なんでしょうか。」

促されるままにカップを手に腰を落ち着ける。

『イルツィーネが目覚めた。』

「・・・・っ!?」

『ファルボックの件はイルツィーネが原因と見てほぼ間違いかなろう。恐らくクラウドも気づいている。水晶の異変はファルボックが

押さえていたから気づきにくかったようだが、イルツィーネの事は可成りの負担を伴って思い知らされただろう。・・・・・・・・・・・・・・・聞いておるのか。』

冒頭の一言で呆然としたヴァイネルに、リヴァイシスはやや呆れ気味で確かめる。
カップの中身が零れそうだ。

「っ！・・・・は・・・・はい。取りあえず今直ぐに出来る対応としては魔の間の封印と、クラウドの部屋の結界ですね。」

現実に引き戻された次の瞬間には、既に対処する思考が働いた事は称賛に値するだろう。
すぐに手元を正し、落ち着ける様に一口飲む。
満足げにリヴァイシスが口元を緩めた。

『あぁ、丁度ヒマなのが居るだろう？　白いヤツ。面倒事は全部押し付けてやれ。』
「どんだけ嫌いなんですか・・・・・。」

呆れた様に呟くとニッと口元を歪めて『死ぬ程。』と即答され、ハハハと乾いた笑いと共に顔を引きつらせるしか無かった。

『ただ、今ひとつ解らぬ事がある。』
「？」

肘掛けに肘を置き、両手の指を絡ませる。

『何故、目覚めたのか。』

「確か文献に寄れば、イルツィーネ様はイル様とツイーネ様の総称で、ラグナード封印の際に共に眠りにつかれたと・・・・・」

書庫で漁った文献を思い出す。リヴァイシスの前では「伝説」の2文字は禁句だ。

彼曰く『伝説とは都合の良い紛い物』だそうなので、彼と「伝説」について話す時は、基本的に史実として残されている皇国の書庫からの知識のみで話さなければならない。

・・・とはいっても、皇国の書庫も粗方は「皇国にとって都合の良い文献」しかないのは言わずもがなと言った所なのだが。

『ライリーンの封印が完璧でない事を差し引いたとしても、やすやすと呼び起こせるモノではない。イルはツィーネが引っ張られて居なくなったと言っていた。人が関与しているのか問うてみたが解らんらしい。』

「・・・・・お会いになったのですか。」

ともすれば敵ともなりうる相手に。・・・・・そういう意味も込めて問う。

『食いつくのはソコなのか・・・？・・・・・どうでも良い事に食いついてくるな。』

一瞥の後、軽く一蹴される。

『イルツィーネが目覚めたという事は、ラグナードの封印が緩んだという事だ。』

瞠目した。

そこまで言われて気づく。

ラグナードが解放されれば・・・・・・・・・

伝説は繰り返される。

『人為的かどうかは解らぬと言っていたが、この国に漂うエネルギーの流れを見る限りでは自然に目覚めたとは考えづらい。』

ーーーということは。

「・・・・ 畏まりました。人為的な線を探してみましょう。」

この国に争い事が無くなって１００年近い。

今の所、表立った外交に不審な点は報告されていない。

唯一気になる所と言えば、北のエンブリオ皇国が隣接する東側の小国と小競り合いを起こしているという事くらいだろうか。

何らかの理由でヴェルドニア皇国に手を出すにしては地理的にも遠い。

それに、挟まれる危険を考えないとも思えない。

エンブリオではなく、小国が何らかの細工を考えているとしてもリ

スクを考えれば微妙だ。

と考えれば。

『１００年も有れば、平和以上の多くを望む者が居てもおかしくはない。』

「・・・・・・・・・・・・・・・熟した果実は内側から腐敗する・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ということですね。」

リヴァイシスは愚かだな・・・と呟く。やはり何も変わっていないと。

「まずは情報集めからですね。その上で何らかの算段を講じて打てる手は全て打ちましょう。」

お茶を飲み干し、カップを手に立ち上がると茶器の傍らに置き、そのまま扉へ向かう。

「相手が人間の可能性があるのなら気が楽ですよ。後々面倒な事にもなりにくい。全て無かった事に出来ます。」

俯きながら歩くその表情は、前髪に隠れて見る事は出来ないが明らかに口元は笑みを浮かべている。

扉に突き刺さった剣を引き抜き、天窓から僅かに漏れる赤い光にかざす。

ひとしきり眺め、それを手にリヴァイシスの足下まで来ると跪いて両手で差し出した。

「その腐敗、抉り出してお見せましょう。」

楯突いた事、後悔させてくれる。
どうしてくれようかと考えるだけで愉悦で口元が緩む。

『相変わらず、良い性格だな。・・・・・・サーシャに知られれば面白いのに。』

剣を受け取り、鞘に納める。
ヴァイネルが射抜く様な眼差しを向けると、溜め息をついて『鬱陶しいからやめろ』と手を振る。

『クライシス達(小僧共)にも何か手伝わせれば良い。ヒマそうだからな。・・・・・喜ぶんじゃないか？』
「あぁ、そういえば・・・・こちらへご一緒しますか？と伺ったのですが、すぐ怒って面倒くさいから嫌だと言われましたよ。」

溜め息が出る。

「いい加減、ご自分の子孫に優しくして差し上げたらどうです。」
『馬鹿を言うな。ちゃんと優しくしているだろう。』
「サーシャ様だけではダメです。」
『そうじゃない、ちゃんと生かしておいてやってるだろう。あの香臭い忌々しい神官姿を見るたびに、言い様の無い殺意を覚えるんだが我慢してやってるではないか。』

どうだと言わんばかりに視線を投げられる。
自分の子孫に殺意を向けるご先祖・・・・。

「・・・・・・なんでそうなるんですか・・・・・・。」

跪いていて良かったと思う。そのままガックリと項垂れるのに床が近くて好都合だ。
流石にクライシス様達が気の毒になってくる。神官というだけで嫌われているのだ。

「神官じゃなければ違うんですか。」『どうだろうか。昔は可愛かったがな。』

コレ位の時。といって示すのは膝より少し高い位の大きさ。・・・・・どんだけ昔ですか。

「はぁ・・・・。・・・・・私の用件は済みました。退室させて頂きます。」

やる事はいっぱい有る。このままこの部屋に居てもグダグダと成り兼ねない。
だったらさっさと退室するに限る。

『・・・ご苦労。クラウドの件、頼んだぞ。』

真剣な眼差しでそう言われる。
畏まりました。と最後に完璧な礼を取って背を向けると部屋を出た。

＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋

街道沿いの街　サウス

湖を後にしてから丸1日。
クラウドとラングルドは皇都の1つ手前にある街道沿いの街に入っていた。
もう日が傾きかけていたので急いで宿を探すが、既に2件断られていた。
「どうしましょうかねぇ・・・・・街を出て野宿にしますか？」
琥珀色の髪を靡かせフワリと振り返る
意外にもあっさりと諦めようとするクラウドにラングルドが苦笑する。
「お前、楽しんでるだろ。」
そんな事無いですよ。とにっこり笑う。
ラングルドの後ろをすれ違った年頃の女性達が、顔を真っ赤にして足早に走り去っていった。
恐らくラングルドに笑いかけたのを正面で見てしまったのだろう。
？のマークを顔に貼付けてクラウドが首を傾げる。
「何かついていますかねぇ・・・。」
気にする様に自分の顔をペタペタと触っている。
「・・・・・・。」
皇都に近いこの街は大きい。上流階級の貴族の屋敷も多く活気に溢

れている。
道行く人も様々だが、他の街に比べれば若者も多い気がする。
予想より少し早い様な気もするが・・・・・・・・・・・・・・・仕方ない。
そう溜め息をついて革袋からフードを取り出してクラウドに投げる。
「・・・・・・・・・被っとけ。」
「??」
「・・・・・・いいから。何も聞かずに被れ。」
「でも・・・・・・。」
「また・・・・・・男に追っかけ回されてぇのか。」
「っ!!!!!」
手にしたまま抗議しようとしていたが、最後の一言で慌てて被った。
自分の容姿がどう見えるか、城での生活で解っていた筈だろうが・・・・・・ルルドで人並みの生活をする様になって鈍ったか。
「や・・・っ・・・宿屋探さないとですね!」
動揺を隠しているつもりだろうが、全然隠れていない、丸見え。
そうこうしているうちに、ちょっとした広場に出て来てしまった。
仕方ないのでどこか座れる場所をさがし、少し目につきづらい所のベンチを見つけるとクラウドを引きずってそこに座らせる。
一緒に探してるとその内に騒ぎになりそうだと判断した。
「宿は俺が探してくる。俺が来るまでココに居ろよ。動くなよ、誰にもついてくなよ。」

ビシッ！と眉間を指差され言葉に詰まると。子供じゃないんですからと反論してきたが「ウルサい」と一蹴した。

とにかく、どこでもいい。どこか探さなければ。

そう呟くとラングルドは夕闇にまぎれ街の中に消えていった。

【13】

クラウドは言われた通りに大人しく待っていた。

時折、風に乗ってくる声を聞き、広場の噴水の水音に耳を傾けていた。

と。

端からは見えるだろう。

実際は、風に乗る声で「風の精霊　ウィンニーア」と、噴水の水音で「水の精霊　アルシオーネ」と会話をしていた。

いや、会話というのはちょっと違うかも知れない。

『あら、いやだわ、クラウ。まだこんな所に？』

『だめよ、ウィンニィそんな事言っては。クラウは人間だもの。私達の様に飛べないのよ？』

『アルシィはクラウに甘いわね！人間の子なんて甘やかしたら面倒くさいのよ？』

『あら、ウィンニィも私に負けない程、クラウに甘いじゃないの。知ってるのよ、私。』

『あ！アルシィ、それは言ってはダメよ！』『・・・そうね。ふふふ。』

・・・・・・・そんなやり取りがクラウドを無視して一方的に繰り広げられているのだ。

「・・・・二人とも仲が良いですねぇ。心配して下さって有り難うございます。」

目を閉じて風と水音を感じながら、姉妹の様に微笑ましく感じるやり取りに口元に笑みを浮かべる。
もう既に日は落ち、夜の闇へと変わろうとしている。

『し・・・心配なんかしていないわっ！・・・・・ちょ・・・ちょっと気になっただけよ！』
『ウィンニィったら・・・・・クラウ、少しは元気になったかしら？・・・本当は私もウィンニーアもクェイカードも・・・ちゃんと姿を現して貴方にもっと優しくしてあげたいの。・・・でも私たちはファルボック程には力が無いし、こうやって自然の力を媒介にして声を届けるしか出来ないの・・・・・。クェイカードもちゃんとココにいるのよ？・・・・土の精霊だし無口だけど、同じ様に心配しているわ。』

ふわりと風が頬をなでる。

「えぇ・・・・元気になりましたよ。大丈夫です。」
『ま・・・・また、話しかけてあげても良いわよ？！』

風の流れにそっと手を差し出すとウィンニーアが照れくさそうにいう。
姿は見えないが心遣いは見える。

「はい、有り難うございます。」
「お礼ついでと言ってなんですが・・・・・・・・・一つお願いが有りますが・・・・聞いて頂けますか？」
目を開けベンチから立ち上がるとそっとフードを外す。
願い事をするのに顔を隠したままでは失礼だ。
「ファルボックの事、支えてあげて下さい。先日、酷い事を言ってしまいました。彼の為を思っての事のつもりですが恐らく可成り傷つけたでしょう。水晶も砕け、只でさえ不安定なのに・・・・配慮が足りませんでした・・・・。」
俯く。時間が経つにつれ、さすがに言い過ぎたかも知れないと後悔していた。
暫く2人とも何も返して来なかった
そして一陣の風がクラウドの髪を絡めとって舞う。
サラサラとした琥珀色の髪が、いつの間にか灯った街灯に照らされ煌めく。
『嫌だわ、クラウったら。そんな事を気にしていたの？！』
溜め息と共に聞こえて来たのはウィンニーアの声だった。
『流石に私も驚いたわ。思わず言葉が出なかったもの。クェイカードなんかまだ固まってるわよ？』
続いてアルシオーネ。
ひと呼吸置いて

『そんな事はとっくにやってるわ。ファルボックだってちゃんと解ってる、反省してたもの。』
『クラウが思う以上に私たちは仲が良いのよ?!』
『そうよ?・・・・だから気にしないで、ちゃんと顔を上げて頂戴』
アルシオーネの声が心にしみる。ウィンニーアの勝ち気な声が耳元で囁く。
顔を上げればそっと頬をなでられた気がした。
『あら。・・・・どうやら宿が決まった様よ?』
『クラウ、またね。』
『・・・・。』
そう言うと3人の気配は闇に溶けていった。
向こうを見ればこちらへ歩いてくるラングルドの姿が見える。
そしてこちらの姿を見るなり眉を顰めた。
「何やってんだ、お前・・・・被っとけって言っただろうが・・・・・・。」
「・・・ぅわっ!」
ガバッとフードを被せられ声を上げると「うわっじゃねぇ!」と怒られた。
「ちょっと歩くが良いトコがあった、行くぞ。」
そういってクラウドの手を掴むと、来た道を引き返す様にザクザク

と歩いていく。
体格的な問題も有るが、普段歩きまくっているラングルドの歩調と、割とゆったりした生活をしていたクラウドの歩調は意識しない限りはやはり合う筈も無く、結局引っ張られる形となるのだ。
一緒に歩く時に如何に気を使ってくれているか思い知る。

同じ「男」なのに、何で引っ張られてるんですかねぇ・・・とか思わなくもなかったが、怒らせた後に抗議するのも面倒くさかったので、成すが侭に引っ張られていった。

普通に二人連れ立って歩くより目立っていたのではないかと思ってしまう。
フードが取れない様に必死に押さえていたが、そっちに集中すれば足下が疎かになり、何度か躓いたりして幾度と無く彼に助けられていた。

裏道を通っているのか街の賑やかな場所からだんだんと遠ざかり、道も少し悪くなって来ていた。
自分のペースではないせいか、息も若干上がる。

「あのっ！　ラングっ！　一人で歩けま・・・・・・・」

躓く回数も数え切れなくなり、抗議しようか散々迷った挙げ句、ようやく「やっぱり抗議しよう」と声をあげた時、突然目の前が開けた。
それと同時に、急に立ち止まりこちらを向いた彼に対処し切れず、彼の胸元に顔面をしたたかに打ちつけた。

「っつぅ！」「あぁ、悪ぃ。・・・・着いたぞ。」
恐らく赤くなっていると思われる鼻をさすりながら、言われるままに立ち止まった先を見る。
「ラ・・・・・ラング・・・・・・こ・・・・ここは・・・・・・。」
「あぁ、皇族の別宅ってやつ？」
立派で重厚な鉄柵の門の奥には、きちんと手入れされたアプローチが続いている。
この場所から見るには小さく感じるが、アプローチが吸い込まれていく先の玄関の大きさと比較してみても可成りの大きさの建物である事が伺い知れた。
門を見る限りでは年代を感じるが、ただ古いだけではなく風格が有る。
入り口の門扉には方陣の中の龍に剣が交差している紋章・・・・・皇族の紋章が掲げられており、一目で縁の施設と知れる。
「そんなのは見れば解りますっ、聞きたいのは何故ここなのかという事です！」
「・・・・・・さぁ？」
必死に問いただそうとするクラウドの顔を見て「結構強く当たったな・・・」などと暢気な事を考える。
「ラング！まじめに！」
「いや、困ってるならどうぞって言われたんだって。」
胸倉を掴み掛かるクラウドに呆れながら答える。
陛下大事、皇族大事のクラウドにしてみれば、自分が皇族の別宅を

使うというのはどんな事情でも有り得ない事なのだろう。
まぁ普通の考えだ。
「そんな訳・・・っ！」
鼻先をかすめる程に顔を寄せ、食って掛かると勢いでフードが外れた。
その時。
「クラウド様。」
門の方から声を掛けられた。
呼ばれた方向へ視線をやると神官の姿をした男が深く頭を下げていた。
「皇帝陛下並びにクライシス殿下、ジュノシス殿下、ルヴァシス殿下の御名にて、クラウド様とラングルド様へ皇国内全ての陛下、殿下方の別宅を状況に応じてご提供する様にと仰せつかっております。」
要は「探しても見つからなかったら使ってもいいよ。」という事だ。
あくまで探す事が前提な辺り、二人の性分を良く見抜いている。
「な？間違ってねぇだろ？」
掴み上げられていた手を解き、そう言うと得意げにふふんと鼻を鳴らす。
「陛下と殿下方が・・・？」「はい。」

神官がその説明をしているという事は、神殿も一枚噛んでいるかも知れない。

ラングルドは密かに眉を寄せ・・・・何だか大事になってきたなぁと溜め息をつく。

皇帝や皇兄、精霊、シオン・・・・早い話が、自分以外、全員。クラウドに甘い。

側に付いて嗜めるべき立場のヴァイネルですら、クラウドの件については大目に見ている節が有るのだから手に負えない。

早朝から割と速いテンポでこの街まで歩いて来た事を考えると、歩き慣れないクラウドを思えば今日は野宿よりもベッドの上で休んだ方が良い事は理解しているつもりだし、

他に宿もない事も考えると皇帝達の好意を有り難く受けるという事に変わりはないのだが、こうやって先手を打たれるのはどうにもむず痒い感じがして落ち着かない。

「お前次第だ。俺はどっちでもいい。・・・どうする？」

困った様にこちらを見るクラウドにそう伝えると、少し悩んでから「では、宜しくお願い致します。」といって深々と頭を下げた。「こちらへどうぞ。」と案内されるままについてゆく。

「そう言えば・・・・ラング、湖でクイントス（皇都）まで2日って言ってましたよね？」

少し歩いてから思い出した様に切り出して来た。

「あぁ。」

「あの時はちょっと思考が覚束なくて気にしませんでしたが、湖か

ら2日じゃ着きませんよ？ここから数えたとしても2日は掛かる筈ですから・・・。」
「間違ってねぇよ、ここまで1日だろ？あと1日・・・・合計2日。」
「ですから、ここからの計算で何故あと1日なんです？」
不思議そうに小首を傾げるクラウドにニッと笑う。
「10日程前にこの街で【龍の道】が開通した。係留所で翼龍を借りれば皇都クイントスまで1日だ。」
【龍の道】とは空を飛ぶ龍を交通手段にした特殊なルートで、古くからあるルートは伝令用のルートとして使用されていたものであるが、サウスのように新設される場合もある。
皇国内の主要な都市を結び、皇帝の許可を得ている者しか使用する事が出来ない。
どのように操るのかと言えば、訓練された龍は知能が高いため一度ルートを覚えさせてしまえば常に人が乗って舵を取る必要が無い。
乗った人間がする事と言えば落ちない様に気をつけるだけだ。
「なるほど、そういう事だったんですね。馬でも無理なのにどうするのかと思いました。」
便利になりましたねぇと笑う。
その反応を見て、おや？と思う。確かクラウドは・・・・
「ん？・・・・意外な反応だな。・・・・・大丈夫なのか？」
「何がです？」

「お前・・・・高い所ダメじゃなかったか？」

その言葉を聞いて急に立ち止まる。
同じ様に立ち止まって彼の顔を見れば、見る見る内に顔から血の気が引いていく。
他人事の様に聞いていたのか。

「・・・・・・・・・・・・・だ・・・・大丈夫です。時間もありません！」

気を取り直すフリをして蒼白のままの顔に笑みを貼付けると、ずんずんと歩き始めた。
大丈夫な割に随分長い空白の時間があった様な気がするが。

「・・・・解り易いヤツ。」「何か言いましたか？！」「何も言ってねぇよ。」

翼龍を使う以上、クラウドの狼狽は覚悟していたとはいえ、明日を思うとちょっと気が滅入って来た。
まぁ、面倒くさくなったら当て身の一つでもくれて、かっさらえばいいや。
そう言い聞かせてガシガシと頭を掻きながら後に続いた。

【14】

「ようこそいらっしゃいました。」

アプローチの先には５０名程の使用人がズラッと両脇に整列しキャンドルを手に持ち、頭を下げていた。

二人の歩みが止まり、顔を見合わせる。

通常、主が滞在しない場合は１０人程度の必要最低限な使用人しか居ない筈である。

それがコレだけの使用人が居るという事は・・・・・・・。

ラングルドは何となく嫌な予感がしたが、ココまで来て引き返す訳にも行かなかったので、誘われるが侭に建物へと入っていった。

「クラウド様、ラングルド様、ようこそいらっしゃいました。」

玄関を入るとソコは広い空間になっており、正面には大きな階段が有る。

その階段と自分たちの間に老紳士が一人、優雅に礼を取っていた。

「皇兄殿下より、この館の管理を仰せつかっております、スレインと申します。」

皇兄殿下・・・・・嫌な予感的中。

ラングルドは胸の内で盛大に舌打ちをした。

門扉の紋章だけではどちらの管轄なのか解らなかったが、神官が居た時点で気づくべきだった。

「ラング・・・顔に出ています。」「気のせいだ。」

肘で小突かれるがシラを切る。無駄だろうが。

「・・・・・・絶対来るつもりだぞ。」「そのようですね・・・・・・・・。」

ココまで準備万端なのだ、最速の翼龍を使ってかっ飛んで来るに違いない。

この時間に居ないという事は、仕事はこなしてから来るようだが・・・・・。

「あと1日だって解っていらっしゃると思うんですが・・・・・。」

「・・・・・セフィルスへの当て付けだろ。1日って言っても大雑把に考えてだからな。厳密に言えば半日も飛べば来れる。加えて、速い翼龍ならもっと早く着くだろ。」

溜め息がでる。

気を取り直して、クラウドは待ってくれている目の前の紳士に「宜しくお願い致します。」と頭を下げた。

「まずはお部屋にご案内致します。」

そういってこちらへ背を向け、正面の階段を上ってゆく。

２０段程上った先で左右に分かれ、緩くカーブを描くその階段は段を重ねるに連れて目下の玄関ホールの全体が見渡せる様になり、そのスケールの大きさと立派な造りに感嘆せしめられる。

吹き抜けの様になっているホールの反対側には大きな窓があり、その先には裏手にある広大な庭が見渡せる様になっていた。

丁度ホールの真上くらいまで上ると2階のフロアに着いた。
たどり着いた先もはやり広い空間になっており、大きな窓に豪奢なカーテンが天井から床まで下がっている。

その広間を通り過ぎ、奥へと続く廊下を歩くと中程まで進んだ所の扉の前に立ち止まる。

「こちらのお部屋でございます。お部屋の中の事に関しましては後に侍女を付けさせて頂きますので、ご要望がございましたらその者へお申し付け下さい。」
「・・・・・・。」
「どうかなさいましたか？」

案内された扉の前で何か言いたそうな顔をするラングルドにスレインが声をかける。

「いや、別に・・・・・。」
「中は別になってございます。」

何が言いたいのか察したのだろう、ラングルドが濁した先をスレインが応えると
ふーん、と返事をして扉を開け中に入った。
革袋を降ろし、剣も穿いたままで近くの椅子にどっかりと座る。

「スレイン。殿下にはいつ頃？」

ラングルドの様子を見ていたクラウドは、隣に立つスレインに視線を合わせる。
きっと何かのタイミングを目安に来るだろう。一番解り易いのは・・

・・・

「お二人が検疫を終えられたら報告をあげる様、仰せつかりました。」

やはり。と合点する。

ヴェルドニアは国内全ての街が高い壁によって囲まれており、外への出入りは多くて四方にある４カ所の検疫所の何れかを通って行かなくてはならない。

タイミングを計るとすれば検疫所を抜けるタイミングが一番確実だ。

クラウド達が検疫を終えたのは日が落ちて少ししてからだから、精霊の力を借りて連絡を取っていたとすれば今頃は皇兄殿下の耳にも入っている事だろう。

ということは、今夜の宿が別邸で良かったという事になる。

検疫終了後がサウス到着の報告の目安ならば、民間の宿を取れていたとしても押し掛けてくる気だったという事なのだ。

勿論、「お忍び」としてくるのだろうがあんなに目立つ兄弟は皇国中を探したって居ない。

大騒ぎになる事は目の目を見るより明らかだった。

「そうですか、有り難うございます。」

頭を下げると部屋に入るとスレインも頭を下げ、それから扉を閉めた。

扉が閉まったのを確認するとラングルドが口を開く。

「ちょうどいい、道中でのアレ、報告しておくか。」

「そうですね・・・・実害こそありませんでしたが、気持ちの悪さが気になります。」

部屋の隅に荷物を置くと窓際へ寄り外を見る。
アレはどう見ても正常な人間の精神では無かった。探り出そうとした時に引っかかった、あの黒い霧も気になる。
ガラスに映る自分の瞳と合う。
狙われたのは自分たちだが、うわ言の様に紡がれた言葉の通り、理由が「誰かの為」で矛先が不明である以上、報告はあげる必要が有る。

「・・・・・気づいていたか？」
「えぇ。放っておきましたが。」

ガラス越しにラングルドを見る。
彼は立ち上がると腰に穿いていた剣を外して近くのテーブルに置くと、そのまま装備を解除してゆき床に散らかす。
一通り外し終えると、足で適当に隅に寄せ革袋から着替えを出す。

サウスに来るまでの間、何度か似たような気配は感じた。
襲ってくるでも無く、微妙な距離感を保ったまま着いてくるという事に意図が掴みかねた。
向こうの出方を探るという事で二人は気づいていながらも放っておいたのだ。

恐らく、こうしている間もどこからか監視しているのだろう。
「今夜、来てくれれば楽なんだがな。」

そういうとクラウドの返事を待たずに「風呂行ってくる。」といって着替えを手に部屋を出て行った。

確かに、今夜来てくれれば色んな意味で話が早い。

だが、皇族の別邸では襲撃の可能性は低いだろう、どうする・・・・一番手っ取り早いのは誘き出す事だが、どちらが標的なのか確証がない。恐らく自分だろうとは思っているのだが・・・・。一人で何とか出来る自信は無い訳でもない、ただ心配をかけるかも知れないという事が決断を鈍らせる。自分の手を見つめ強く握り込む。

「おい。」

不意に呼びかけられ驚いて振り返ると、出て行ったと思っていたラングルドが腕を組んでドア枠にもたれ、出入りを阻む様に足を掛けていた。思わず「うわっ！」と言いそうになるのを口を押さえて飲み込む。

「くっだらねぇ事、考えてんじゃねぇぞ。俺が戻るまで大人しくココに居るか、一緒に風呂に行くか、どっちか選べ。」

横目で睨まれる。思考はすっかり読まれていたという事だ。おまけにいつぞやに聞いた陛下の台詞に被せて来た。・・・・・バレては仕方が無い、そう諦めて緩く首を振る

「・・・・解っていますよ。大人しくしてます、ラングはどうぞ湯浴みに。」

「・・・絶対、勝手な事するんじゃねぇぞ！？」

ビシッと指を指して念を押すと今度こそ部屋を出て行った。心配性というか、何と言うか・・・苦笑しながらラングルドが散らかした装備を片付け、自分の荷物から着替えを引っ張り出すとテーブルにのせる。

ーーコンコン。
開け放たれたままの扉をノックされる。そこに立っているのはスレインだ。
「失礼致します。先ほど知らせが参りました、あと1時間程でご到着します。出迎えは必要ないとの仰せですが如何致しますか？」
「では広間にてご挨拶をさせて頂きたい。お取り計らいをお願い致します。」
「畏まりました。ーそれから・・・。」
一度深く頭を下げると姿勢を正し、自身の背後を振り返ると後ろからおずおずと少女が顔を出した。
「お二人のお世話をさせて頂きます、シュナと申します。何なりとお申し付け下さい。」
まだ10歳かそこらの少女だ。
侍女というよりは小間使いと言った感じだろうか。スレインに促されクラウドの前に立つとゆっくりではあったが、目上に対する正式な礼をみせた。
緊張のせいか声が少し震えている。
「・・・・・・スレイン、この子にどのような説明を？」
「クラウド様とラングルド様のご身分、それからクラウド様と殿下方とのご関係を説明致しております。」
はぁ・・・と溜め息をつくと少女に合わせ腰を屈める。
そんな説明をされたら緊張するのは無理も無い。

皇族の別邸に侍女として入れるのだから、相当の家柄の者だとは思うがそれを踏まえたとしても、彼女が皇兄殿下に直接拝謁した事は恐らく無いに等しいだろう。
言わば、巡り巡って自分もラングルドも彼女に取ってみたら「雲の上の存在」なのだ。

「緊張しなくても良いですよ。自分の事は自分で出来ますから、貴女は退ってくれて構いません。」
「で・・・ですが・・・。」

優しく声をかけると困った様に俯いてしまった。
彼女はチラリとスレインを見る。
それをみて「あぁ、そうか。」と思い当たる、これでは彼女から「仕事」を奪ってしまう。

「あぁ・・・・・いや、では・・・・私の話し相手になって下さいますか?・・・・構いませんよね、スレイン?」
「えぇ、クラウド様が宜しければ。」

そういうとスレインはシュナに向かって粗相の無い様にと念を押して去って行った。

「ラングが戻るまでで結構ですからね。まだ君は小さい、仕事とはいえ余り遅くまで起きているのは感心致しませんよ?」

スレインの後ろ姿を見送っていた彼女に、そっと声をかけると振り返った彼女の双眸と視線が合う。
彼女に笑いかけ、中に入りましょう。と促す。
年頃が近いせいか、彼女を見ているとベリケを思い出す。離れて数日というのにあの賑やかさが懐かしく思えるのは何故だろうか。

「あの・・・・・。」

部屋に入りつつ、少し怯えながら彼女はクラウドに呼びかける。

「なんですか？」

「クラウド様にお会い出来て嬉しいです。」

突拍子も無い言葉に思わず目を見張ると更に彼女は続けた。

「お会い出来て光栄です。・・・・・・・ お兄様。」

その瞳は羨望と言う名の熱を帯びていた。

【15】

沈黙が降りる。
程よい温度に保たれている筈の部屋は見る見る内に冷え、重苦しい空気が充満してゆく。
一族の御家騒動にもなりかねない不穏な発言、ひいては皇国内にも影響が出る・・・・そう思ったクラウドの気配には一瞬の隙もなかった。

「突然で失礼致しました、クラウド様。お会い出来たのが嬉しくて、つい・・・・。」

失言でございましたと頭を下げる。
冷えきった自分の視線に話を逸らそうと言うのだろうか、失言であろうが何だろうが耳に留まった以上、たとえ発言したのが子供と言えども逃す訳には行かないと捩じ曲げる。

「・・・・・・どういう事です。」

謝罪を聞き流し視線を鋭くする、とても子供に向けるそれではない。
それでもシュナは怯む事無く続ける。

「・・・・私の父はノワイエ＝フォン＝デュアリス様でございます。母はティアラ様の侍女でございました。母の名は・・・・・」

クラウドの記憶を辿っても、間違いなくクラウドの父の名はノワイエであったし、母の名もティアラであった。
シュナの口から紡がれる言葉に、クラウドの思考が過去を手繰る。
母の侍女の名はハンナ、シンリー、そして一番のお気に入りだった・

・・・

「エレナと申します。」

クラウドが最後に思い出した名前と、シュナが口にした名前が重なる。

母とやり取りしていた手紙の中で何度も出て来た名前だ。

クラウドは生まれてすぐに城へつれて来られ、母の記憶は殆どない。
逢う事は愚か、城から出る事さえ赦されない身である、そんな自分が母との間で唯一赦されたのは手紙だけ。
幼い頃は文字が読めなかった為、セフィルス様、リヴァイシス様に読んでもらったりしていたが、そのうちに自分で読める様になった。
母から毎日の様に届く手紙には日常の事と、クラウドの身体を気遣う事くらいしか書かれていなかった。
しかし、ある時を境に時々出てくる様になったのが「エレナ」という名前だ。
随分と昔の話になるがクラウドの記憶が正しければ、エレナはシィズヴァイア男爵家の遠縁とかで、とてもかわいらしく気に入っていると書いてあったと記憶していた。

手紙にはエレナの事は深く触れられていなかった。
だからエレナの存在は知っていたが、まさか自分に異母妹が居ようとは思いもよらなかった。
溜め息と共に表情と気配を緊張から緩め、近くの椅子に座る様に促した。
恐らく、彼女の言う事は嘘ではないだろう。
デュアリス家は他の家と比べるとかなり排他的な体質があり、女主人付きの侍女の名前が外部へ漏れる事は絶対にない。
一族が排他的である理由は当代当主のみに明かされる真実であり、

その役割を担う為の違える事の出来ない領域でもあった。

「なぜココにいるんです？」

少なくとも『デュアリス家』を名乗るのなら、侍女などに身をやつさなくとも、望めば皇兄の妃候補にだってなれる筈だ、皇帝が男であれば皇妃候補にだってなれる。
婚姻の際の年齢差はともかく、皇国一の名門デュアリス家の名はそれだけの力と価値がある。

「私がデュアリス家の人間ではないからです。」

きっぱりと言い切ったその一言が全てだった。
この少女も自分と同じなのか・・・・ そう思ったら言いようのない怒りが込み上げて来た。
認めなかった上に見捨てたも同然の扱いだ。

父は長男であるクラウドを紋様を持ったが為に品物を献上する様に城へ差し出した。
それ故に自身の跡継ぎは別にもうける必要があった。
だが、クラウドの母はクラウド産む事と引き換えに二度と子供を授かる事の出来ない身となったのだ。
となれば、父は跡継ぎを得る為に母以外の女性との間に子をもうけなくてはならない。
母は寂しさを感じてはいるようであったが、自身が皇族であった為かそういった事にはある程度理解していた。
心で割り切れない部分が有るにせよ、仕方の無い事、身分ある家柄には当然の事と受け入れているようだった。

父が母以外の女性との間に産ませたのがシュナと言う事なのだろう。

そして、父はシュナが女児であったが故に黙殺し存在を否定した。
跡継ぎとは男子であるべきで男児は必要で女児は不要なのである、
不要な物を残しておくという選択肢はクラウドの父には無い。
何とも身勝手で傲慢で醜い事か。

クラウドは父の身勝手で傲慢で醜い行いに身震いした。
半分でもその血が流れているかと思うと、今直ぐに喉元をかっ捌き
全身の血液を入れ替えたいという衝動にすら駆られる。

そう、クラウドは父を軽蔑していた。父とは認めたくない程に。
元々の性格が穏やかであるせいか人を嫌いそうには見えないが、ク
ラウドにだってソリの合わない人間位は居るという事だ。

「8年前、お母様はまだ小さかった私を連れてお屋敷を出ました。
二人きりで貧しかったけどいつもお母様と一緒で楽しかったです。」

ありがちな話ですけど・・・と笑みをクラウドに投げかける。
見覚えのある笑い方に心臓が鷲掴みにされたような衝撃が走る。
大人の事情に振り回され、子供である事を諦めたのか。

「デュアリス家とシィズヴァイア家は何も・・・？」

やっとの思いで問うと、シュナは微笑みながら緩く首を振る。

「お父様もおじ様も私の事は無かった事だと申されました。お二人
とも先の皇妹様であるティアラ様の為にそうなさったんだと思いま
す。それに・・・お父様やおじ様にはお立場が有りますから、私を
お認めになる事は出来なかったんだと思います。お母様は私が居て
くれれば良いと言ってくれましたし、私も皆様が笑っていて下さる
のならそれで良いと思います。子供の私に出来る事は何も有りませ

んから。それに・・・。」

「・・・・・もういい。」

ぽつりぽつりと、まるで自分に言い聞かせる様に呟く、その姿が恐ろしく痛ましい。
たまらずに全てを吐き出させる前に遮る。聞いてなどいられなかった。

まるで幼い頃の自分を見ている様な感覚に落ちてゆく。
色んな可能性を見いだしては諦め、縋っては裏切られ、いつしか自分から求める事はしなくなった。
あの父は第二の自分を作り出したのだ、感覚が重なったとして誰が責めるだろうか。
気がつけば少女の身体を引き寄せ腕に収めていた。

「ク・・・クラウド様？」
「・・・・自分がどんな顔をして話しているか解っているのですか？」
「あ・・・あの・・・」
「存在を否定されて何故、笑っていられるのです。まだ子供でしょう、聞き分けの良いフリはやめなさい。何故、辛いと言って泣かないのですか。」

ビクッと肩を震わせる彼女を更に強く抱きしめる。
頭を自分の胸元に押し付けその心を見せるかの様に・・・

「何故、私を訊ねなかったのです。私の存在は・・・・・良く知っていたでしょう。」

少なくともこの国の人間ならば「伝説の具現化した証」として知っている筈だ。
ヒュッと息を吸う音が聞こえ、シュナが顔を上げる。
その瞳は何かを必死に我慢している様であったし、幾分か子供らしさも見え隠れしていた。

「それは・・・・っ」

言葉の先を顔を見て受け止めようと腕を解き、解放すると

「できねぇだろ、お前を知れば知る程その選択肢は薄れる。そんな事は子供にだって分かる話だ。」

いつからソコに居たのか、ラングルドが濡れて深みを増した紅色の髪を拭きながら部屋に入って来た。
被ったバスタオルの間から、ちらりとシュナを見る。
シュナは紅い視線に一瞬ひるんだが、敵意は感じられず鋭く感じる印象は生来の物で、口元が引き上げられるのを見て他意が無い物だと知る。

「ラング・・・」
「で？。拾われたのか？」

そう声を掛けられると、彼女の肩がビクッと跳ね上がった。
服を着て下さいというクラウドの声を無視してバスタオルを首に掛け、シュナをじっと見る。無言の合間に拭い切れなかった雫がポタポタと胸元に落ち、程よくついた筋肉の上を滑ってゆく。
ラングルドの言葉に明らかに動揺し、視線も合わせられないと言っ

た様相だ。
修羅場を駆け抜けた男の眼力を去なす事は大人の男でも難しい。
そんな彼女の様子などお構い無しで無言を肯定と受け取り、溜め息をつく。
取って食おうなんて思ってないんだが・・・ 萎縮している原因が自分である事に気づいて小さく呟く。

「ふーん・・・・・。」

脳裏をよぎった事を口にしても良い物かどうか躊躇う。
それはクラウドも同じだった様で、困った様にラングルドを見る。

「間もなく到着されることですし。直接お伺い致しましょうか。」

クラウドがそういうと、シュナは思い立った様に「お迎えの準備がございますので」と言いおいて礼をすると部屋を出て行った。
大凡(おおよそ)、「ラングが来るまで」という先のクラウドの言葉を思い出したのであろう。

彼女が出て行くと二人はめいめいの行動に出る。

ラングルドは窓枠にもたれかかり頭を拭くのを再開し、クラウドはその様子を見るでも無く外の風景とガラスに映り込む自分の姿を何となく眺めていた。
再び沈黙が支配する。

それぞれの思う事があるが故の沈黙だが、クラウドもラングルドも割とこの沈黙が嫌いではなかった。
傍に居るだけで落ち着くとはこういう事なのだろうと思う。

「私もお風呂を頂いてきます。ラング、殿下との謁見が有りますから。・・・解っていらっしゃいますよね？」

そう言って用意していた着替えを手に立ち上がると、ラングルドにそれなりの格好をする様に促す。

放っておくといつまでも半裸のままでウロウロしていそうだ。

そのままの格好で謁見などということは何としても避けねばならない。

当の本人はハイハイ。と言いながら手をヒラヒラと振る。

本当に解っているのかアヤシい物だ。

不安は残る物の自身も支度をせねばならない手前、ラングルドを一人残し廊下を歩く。

どうせ入れ替わりになるのなら着替えさせる為という口実でシュナを引き止めておけば良かったかと思ったが、

やはり遅くまで起きているのは良くないと首を振る。

スレインからの報告を受けてから、意外と時間が経ってしまっている。

急がねば殿下が到着される時間に間に合わない。

そう思い至り、途中ですれ違ったメイドに浴場の場所を聞くと急いだ。

【16】

＋＋＋＋＋＋＋＋

湯浴みが終わるのを見計らったかの様なタイミングで皇兄殿下方の到着を知らされ、
そのまま手早く着替えると急いで部屋に戻った。
直接、広間に行こうかとも思ったのだが、適当な返事を返していたラングルドがどうしても気になった。
ちゃんと仕度ができているのだろうか。

「ラング！」

ノックも無しに勢い良く部屋の扉を開ける。

「おぉ、更に美人になったな。」

部屋の真ん中に椅子を据え、扉を開けたクラウドと向かい合う位置に座ったラングルドがニッと笑う。
その姿は先ほどまでの自堕落全開な格好ではなく、きちんと身だしなみを整え深紅の軍服を纏い、白手袋をはめ、きちんと手入れのされた軍靴を履き・・・・・
とにかく非の打ち所の無い堂々たるモノで、その辺の貴族にも劣らぬ様相であった。
別人の様にすら見える。
思わず誰何の声を上げそうになり、慌てて飲み込んだ程だ。

「・・・・・・・・・御陰さまで。」
「ッ・・・・・つれねぇな。」

素っ気なく答えるとラングルドは笑いを堪えながら返す。
その様子に眉をひそめつつ、取りあえず彼の姿を見て一安心し、自分の身なりも整える。

全身が見える鏡の前に立ち、改めてその格好を見る。
魔導士用の白い軍服、襟元は銀糸で細かく縁取られ、袖口には最高位を表す証として、龍と方陣と華の紋様が金糸と銀糸で刺繍されている。
まるで枷のようだと薄く笑う。

髪を結い解れ毛を押さえる為に香油を塗る。襟元、上着の裾、留め具の見え方のチェック・・・・そして宮廷魔導士の証である懐中時計を懐に。
最後にもう一度、頭の先からつま先まで神経質すぎる位にチェックをして、己の及第点を得た所で白手袋をはめながらラングルドに向き直る。

「お待たせ致しました。参りましょうか」

一部始終を見ていたラングルドは目を細め、あぁ、と返事をして立ち上がった。

広間で謁見させてもらえる様にスレインに頼んでいたので、部屋から廊下に出た時には既に彼が廊下で待機していた。
階下まで降りると広間に続く扉の前まで誘われる。
黒々とした見るからに重厚そうで、美しい彫刻が刻まれている。

「殿下、クラウド様とラングルド様をお連れ致しました。」

スレインが扉の前で恭しく頭を垂れ、入室の許可を待つ。

「どうぞー。」

幾分か間延びした声の許可を受け取るとスレインが大きく重厚な扉を押し開く。

広間には3つの長椅子にめいめいの落ち着く格好で腰掛けている3人の男達がいた。

クラウドとラングルドはそのまま歩みを進め、3人の前まで来るとスッと腰を落とし右片膝と左拳を床につき頭を垂れる。
騎士の礼とも言われるが、一般的な臣下の礼にも当てはまる物だ。

「やぁクラウ、元気だったかい？」「また手合わせしてもらおうかなぁ。」「相変わらず綺麗だねぇ。」

クライシスとルヴァシスはクラウドを見て、ジュノシスはラングルドを見て、口々に声をかける。
緊張感の無い声ではあるが、侮れば痛い目に合う。

「クライシス殿下、ジュノシス殿下、ルヴァシス殿下、お久しゅうございます。本日はーー」

二人とも頭をたれたまま、クラウドが形ばかりの口上を述べる。ラングルドは元々そういった事は苦手としているせいか大人しく口をつぐんでいる。

「あぁ、ダメだよクラウ。僕達はお忍びなんだからね。」

「そうだよ、殿下はやめてほしいな。」
「兄上って呼んでよ。ラングもね。」
クラウドの口上を遮り口々に言いたいことを言う。
「それは承服致しかねます、殿下。」
クラウドよりも先にラングルドが顔を上げて答える、茶番などに付き合ってられるか。
ラングルドがキッパリと伝えると、やれやれとでも言いたげに肩をすくめ顔を見合わせる。
「それよりも、ご報告したい事が。」
3人の視線を集めた所で続ける
「ここに着くまでの間、襲撃を受けました。全身黒装束の男、人数は3名。1人は始末致しましたが、残り2名は消えました。」
「・・・消えた？」
「えー、逃がしちゃったのー？」
「はい。打ち合いの最中に違和感があり、どうも操られていた様です。恐らくは親の元へ帰ったのではと。」
「ふぅん？・・・君が逃がすとはね。」
「誰が操ってるんだろうねぇ」
「・・・・。以降、別の者から監視されているようです。殺気を感じなかったので放っておいておりますが。」
「面倒くさかっただけでしょ、ラング。」
「手抜きだよねぇ？」
所々で茶々が入るがいちいち相手にしていたら話が進まないと判断

し、溜め息を一つついてそのまま続ける。

「・・・・・・恐らく、今もどこかで見ていると思います。」

クライシスの顔を見て口元に笑みを浮かべる。
その様子を見て、クライシスがにっこり笑う。

「ふふ・・・・・・ラング、慣れない事はするものではないよ？
従順な君なんか気持ち悪い以外の何者でもないからねぇ。」

両隣ではジュノシスとルヴァシスが笑いを堪え「やっぱり」「変な感じだよねぇ」と囁き合っている。
その言葉を聞いた瞬間、その場に立ち上がり腰に手を当てると襟元を緩め、口角を引き上げる。

「・・・・堅苦しいったらねぇな。・・・・・クイントスに入る前に片付けようと思いますが、どうですかね？」

やっぱりラングはこうでなくちゃ。とクスクスと笑い声が聞こえる。

「・・・いや、そのままでいいよ。実はヴァインから気になる事を聞かされていてねぇ。ラングの言う事案と直接関係があるかどうかは解らないけど、そういった類いの話を片っ端から情報収集しているんだよねぇ。」

トントンと長椅子の肘掛けを人差し指で打つ。

「だから、襲撃して来た場合には出来るだけ殺さないようにね。」
「解りました、ではそのように致しましょう。」

手を胸に添え恭しく頭を下げる様をみて、道化の様だと笑われる。
素直に傅くつもりはないのだから、むしろ笑われた方が好都合だ。

と、突然、何かに気づいたかの様にクライシスが瞳を細めクラウドを見つめる。
先程から一言も発する事無く、床を見つめどこか上の空で話を聞いている。
周囲の動きに目敏いクライシスがそんなクラウドの異常を見逃す筈は無かった。

徐に席を立ちクラウドに近づくと腰を屈める、そっと手を伸ばしクラウドの頬に触れ、そのまま顎まで滑らせグイッと仰向かせた。
跪いていた高さよりも上に持ち上げられ、クラウドは必然的に立ち膝の状態になる。

「で・・・殿下・・・？」

突然の行動にたじろぎながらも真意を問う様に呼びかけると、じっと瞳を見据えられる。
澄んだ蒼い瞳が自分を捕らえて離さない。

「何を考えているの？」
「あ・・・・・。」
「・・・・・・。クラウ、何か隠しているね？」
「な・・・何も、隠してなどおりませんっ！お・・・お疲れなのではございませんか？！」
「随分な事を言ってくれるね・・・・・。僕の気のせいだと？」
突然言われた言葉に、上手くかわせずに思わず声がうわずる。

クラウドは無言で見つめ返すが、クライシスは翡翠の双眸の奥に揺らめく動揺を見逃したりしない。

「・・・嘘だね。」

息がかかる程に顔を寄せられ、何故か心拍数が上がる。
もし、クラウドが年頃の女性であれば気を失ってしまっていただろう。
未だ誰も正妃を持っていない彼らは、その能力、地位、権力、容姿故に女性達の憧れの的なのだ。

「うう・・・・嘘ではございませんっ。」

やっとの思いで答える、何故、男である自分がたじろぐのだろうか。と疑問に思う。
ソレを隠すかの様に必死に動揺を隠し平静を装う。
たとえそれが不自然であって、無理矢理であって、恐ろしく強引であったとしても。

「そうか。じゃぁ見せてもらおうか。」

そういうと苛立った様に身体を起こし、溜め息を一つ付き冷めた声で命を下す。

「上着を脱ぎ紋様を見せよ」

クラウドの目が見開かれる。何故・・・・・と問う瞳がクライシスに縋る

「どういうことだ？何かあったのか？！」

ラングルドがクラウドの側へ屈む。
クライシスとクラウドの顔を交互に見つめ、どちらかが答えるのを期待するが状況的に無理だろう。
氷の様に冷えきった瞳でクラウドを射抜く。

「どうした。嘘ではなく何も隠して無いのだろう？」

口調が普段の物とは違う、珍しく怒っているらしい。
ラングルドはそう判断するとクラウドの様子を見守る事にした。
一体何が有るというのか。

「・・・・できません。」
「命令だ。」
「聞けません。」
「見せろ。」
「できません。」
「クラウ！」
「嫌です！！」

見せろ、嫌ですの押し問答が数回続く。
ジュノシスとルヴァシスは、珍しく怒るクライシスと粘るクラウドを呆然と見つめている。
クラウドのその姿が珍しいのは解ったが、クライシスが怒っているという事も珍しいのかと二人の様子を見て察する

「・・・・・ラング、動くな。」

クライシスがラングルドを横目で見やり一言投げる。
一瞬、「何を・・・」と思ったが、次の瞬間には理解した

ーーービッッ

クライシスはクラウドの前に腰を落とすとクラウドの服を勢い良く左右に開いた。
留め具が弾け飛び、生地が引き攣れ、中に着込んでいた薄地の衣が引き裂かれる。
突然のクライシスの暴挙に、クラウドは身動き1つ取れないまま硬直していた。

肩が剥き出しになり白い肌が露になる。その下には赤い華紋様・・・・・・

そう、湖で見た時の様に白い肌に美しく咲き誇る華の紋様があるはずだった。

「な・・・・・・・・・・な・・・・・・んだよ！これは！！！」

ラングルドが声を荒げる。
手荒な事をしたクライシスに対する抗議ではないようだ。
その視線はクラウドの胸元に注がれている。
ジュノシスとルヴァシスも目にした光景に言葉が出ないでいた。

手のひら程の大きさの内出血の様な・・・・・・どす黒い赤に染まっていた。

クラウドは瞳を閉じ唇を噛んで俯くと二人から顔を背ける。
その様子にクライシスは目を細めた

「・・・・・・いつからだ。」

クライシスの冷えた声が肌に突き刺さるようだ。

「・・・気づいたのは今朝です。湖を発つ前に身支度をしていた時に。」

観念した様にその場に座り込み襟元を合わせて握りしめると、ぽつりと答える。
その手が少し震えている。

「・・・痛みは。」
「・・・・ございません。」

気遣うような問いかけに沈んだままの声音で答える。
直後、顔を上げ

「お願いです！この事は誰にも！！」
「無理だ。すぐにでもセフィルス様とリヴァイシス様にご報告する。ーーールヴァシス。」

縋るクラウドを無視して立ち上がるとルヴァシスの名を呼ぶ、すぐに意図を察すると「はーい。」と返事をして部屋を出て行った。

「クライシス殿下っ・・・・後生です、せめて陛下にだけは内密にっ

！」

必死にクライシスに縋る様は、どこかの演劇でも見ている様な錯覚に落ちるが、縋れば落ちるという訳ではないということも、演劇でのお決まりだ。

「出来ぬ。」

そう言い切られてクラウドは力なく床に崩れた。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6886u/

天地の境界

2011年10月13日09時16分発行